『信長ピンポン

NOBUNAGA PINGPONG!』

登場人物

鷹宮よしのり・・・西高卓球部２年。ある試合がきっかけで試合を恐れている

織田信長・・・何故か現代に亡霊となってよしのりの元に現れる

向井隼人・・・東高卓球部２年。よしのりと、月子の親友。彼もある試合を恐れている

貝原月子・・・西高演劇部２年。今ではなく先を考える性格。夢があり悩む

森蘭丸　・・・信長に心酔しており、彼の願いはすべて叶えようとする

明智光秀・・・信長と同じ亡霊となり現代に現れる。目的を見失っている

【西高等学校卓球部】

伊勢川友也・・・３年・部長。チームで進むことを一番に考えている

細越直人・・・３年。試合において短気。普段は面倒なことを嫌う

池松和馬・・・３年。協調性がある。しかし、それをあまりださない

仲世古雄・・・３年。英の兄。異性に対しての関心が強い。それしか考えてない

仲世古英・・・２年。雄の弟。周りと合わせながらもよしのりの事を気にしている

鷹宮琴乃・・・３年。帰宅部。よしのりの姉。自分が変われる何かを探している

【東高等学校卓球部】

最上大輔・・・３年。部長。人当たりが良く機転も利くが絶対に譲れない部分もある

伊達倉夫・・・３年。勝気。後輩の面倒見がよく人に構う

朝倉道時・・・３年。自分の考えを強く持つ。時にはそれを変える柔軟性もある

亀井誠也・・・３年。現実主義で大きな勝負はせず確実に積み重ねていく性格

蜂須賀新祐・・・３年。落ち着くことをせず常に動き回っていたい性格

篠塚由衣・・・３年。マネージャー。スタイルが良く雄曰く「願望のすべて」

【大人たち】

鷹宮刀馬・・・よしのりの父。元卓球選手。勝ちにこだわりよしのりに求める

田中新二・・・西高卓球部顧問。何も考えていない。様に見える

畔木攻　・・・東高卓球部顧問。‘魔王’と恐れられておりチームを徹底的にしごく

鬼　　・・・西高卓球部コーチ。怖すぎる

第一幕　「敵は」

Ｓ１　西高等学校（以下西高）・演劇部部室
窓から吹奏楽部の演奏が漏れてくる。
貝原「月子」が『ハムレット』の台本を手に持ち台詞をはく

月子　「生か死かそれが疑問だ」

×　×　×　×

Ｓ２　全国中学校卓球大会・試合会場・控室Ａ・Ｂ（数年前）
それぞれの控室に一人ずつ選手が座っている
控室Ａに鷹宮「よしのり」。
控室Ｂに向井隼人。
両方に遠くからの試合の歓声が入る。
よしのり、首にかけてあるヘッドフォンを耳に当て、曲がかかる

×　×　×　×

Ｓ３　西高・教室（現在）チャイムが鳴る。
眼鏡をかけた教師の「田中」新二が教科書を持って教壇に立つ

田中　「はい、座れ、おーい、鷹宮、遅いぞ。うるさい、誰と喋ってる、座れ。はい、教科、書（教科書開く）」

×　×　×　×

Ｓ４　同―京・本能寺―同・前・天正１０年（１５８２）早朝

田中　「今日はみんなお待ちかね、本能寺の変だ。悲劇の主役はもちろん―」

と、寝所に織田「信長」

田中　「織田信長。舞台は１５８２年京は本能寺」

信長のもとに森「蘭丸」が飛んで現れる

蘭丸　「信長様！謀反でございます」
田中　「首謀者は」
蘭丸　「旗に桔梗の紋が」

信長が声を上げて腰を抜かす。
本能寺の外に明智「光秀」の姿が見える

田中　「家臣であった明智光秀は信長を大変慕っていた為、腰が抜けるほど驚いただろうな。光秀が何故、裏切ったかは５００年たった今でもはっきりとは明らかになってはいない」

信長が高笑いし、何がおかしいのかと顔を向ける蘭丸

信長　「蘭丸！火をつけぃ！奴に首を離されるくらいなら自ら灰に化けてやる（蘭丸が何かを発するのを察して）光秀の奴め、先に火が付いたら腰が抜けるぞ。蘭丸、お前は逃げぃ」

蘭丸　「なりません」

信長　「今日までお前は俺の為に生きた、明日からはお前の勝手だ。子でも作って呑気に暮らせ」

蘭丸　「私は最期まで信長様と一緒に」

信長　「男と二人で死ぬなんて御免じゃ。なぁに、地獄でまた会えばいい、なんとかせぇ」

蘭丸　「・・・今まで殿のどんな願いでも叶えてきた蘭丸です。必ず地獄で」
蘭丸が信長の顔を最後まで惜しむ様、その場を立ち去る

信長　「人間五十年」

×　×　×　×

S５　それぞれの場所
よしのりがヘッドフォンの曲を止める。
よしのり、隼人の両者が立ち上がり会場へ向かう

月子　「どちらが男らしい生き方か」

よしのりと隼人が卓球台の前に立ち、構える

信長　「下天のうちを比ぶれば、夢幻の如くなり」

よしのりと隼人の試合が始まる。
よしのりの圧倒的な劣勢

月子　「じっと身を伏せ不法な運命の矢弾を耐え忍ぶのと」

隼人の強烈なスマッシュが決まる。
よしのり、落ちた球に手を伸ばす

月子　「それとも剣をとって押しよせる苦難に立ち向かいとどめを刺すまであとには引かぬのとどちらが」

よしのり、足がすくみ、一歩後ろに下がる

信長　「一度生を享け、滅せぬもののあるべきか」

よしのり、肩が下がり体から力が抜けて棒立ちになる

月子　「いっそ死んでしまったほうが。死は眠りにすぎぬ」

隼人、どうしたのかとよしのりの背中を静かに見つめる

月子　「それだけの事ではないか」

よしのり、とうとう球を拾わずに去ってしまう。
不戦勝になった隼人、何も呑み込めずに去る

信長　「これを菩提の種と思ひ定めざらんは、口惜しかりき次第ぞ」

本能寺に火がかかる。
部室の月子が去る。
信長が舞い上がる火をじっと見つめる

光秀　「なぜ先に燃える。あのうつけは最後まで・・・いいだろう、お望み通りこちらも火をくれてやれ！何も残らぬようのみ食らってやる。敵は、本能寺にあり！」

信長が燃え盛る炎の中、その影を溶かしていく

×　×　×　×

S6　西高・教室

田中　「（教科書を閉じて）はい、それじゃあ次週は光秀を中心に授業するからな。それから卓球部、すぐに体育館集合だ。逃げるなよ」

授業が終わるチャイムが鳴る

×　×　×　×

Ｓ７　同・体育館

ぞろぞろと卓球部が入ってくる。

「伊勢川」友也（三年）、

「細越」直人（三年）、

仲世古「雄」（三年）、「英（二年）」、

「池松」和馬（３年）、

よしのり（２年）

田中　「はい、みんな揃ったな。お知らせでーす、春の大会に向けて練習試合が決まりました。来週」

伊勢川　「どことですか」

田中　「言わない、お前らのやる気がなくなるから」

細越　「（伊勢川に）どうせ負けるからどこも一緒だ」

池松　「言うなよ」

田中　「あのなぁ、先生、卓球の事まったくわからないけどお前らの為と思って頼み込んだんだ、喜べ」

雄・英　「（喜んでるわけがなく）わーい」

伊勢川　「それじゃあ、楽しみは後にとっておこう」

田中　「先生、練習が終わった頃にまた来る」

田中、去る

伊勢川　「なぁ、鷹宮、お前のお父さんにコーチを頼めないかな」

よしのり　「死にますよ」

伊勢川　「昔、プロだったんだろ。そんな人に教われば万年一回戦落ちの俺達西高卓球部も少しは強くなるかもしれない」

池松　「今更あがいても俺達３年組が卒業すれば残るのは（指差しながら）仲世古弟と鷹宮だけで廃部は免れない」

伊勢川　「だから、尚更どうにかしたいんだ。俺は部長でチームを強くする責任がある。最後くらいそれを果たしたい（よしのりに）だから頼む。お願いしてみてくれよ」

よしのり　「後悔しないでくださいね」

伊勢川　「そうこなっくちゃ。（皆に）始めよう」

一同が練習の準備を始める。よしのりに伊勢川が声をかける

伊勢川　「鷹宮、お前みたいな強豪校出身が今も見捨てずにいてくれるなんて嬉しいよ」
よしのり「見捨てるなんて。俺みたいな選手ならピンポン玉の数程います」
伊勢川　「そう言うな、俺らがうさぎならお前はドラゴンだ、火力が違う」
よしのり「部長、俺の事なんだと思ってます？」
伊勢川　「後輩に頼ってばかりじゃ部長としては恥ずかしいけど中学の時に最強チームにいたお前にもっと手を貸してほしいんだ。もし試合に勝てば部員が増えるかもしれないだろ？そしたらこの部でお前たちが卓球を続けられる」
よしのり「・・・」
伊勢川　「頼むよ、助けてくれよ、ドラゴン」
よしのり「・・・（流石に観念するしかなく）俺にできる事があるなら」
伊勢川　「（よしのりの背中を叩いて）そうこなっくちゃ。まずは、お前なりの率直なチームの分析をしてくれ」

よしのりがチームの練習の動きに合わせ独自の解説を始める

よしのり「正直、チームとしてはバラバラでまとまりもないけど、一人ひとりを見れば強みはあるし悪くはないはずです」
伊勢川　「本当か」
よしのり「まずは（誰からかを考え指さす）三年生、細越先輩」

細越、卓球台の前に立ちプレイする

よしのり「前陣速攻型で身長が高いうえにガタイも良くてパワーもある。だけど、駆け引きが苦手でネット際で崩されると自分のプレイが出来なくなる」

細越、その通りの展開になる

細越　「おい！ちまちまネットかけてくんじゃねぇよ、こっちはお嬢様と試合やってんじゃねぇんだ！次やったらネット括り付けて部室前に吊るすぞ！」
よしのり「あの短気どうにかなりませんか」
伊勢川　「無理だ、三年間怒り続けてる」
よしのり「次」

池松、卓球台に立ちプレイする

よしのり「三年生池松先輩。カットマンで細越先輩とは真逆のプレイスタイルで身長も

低いし、パワーも劣るけどその分、走り回ってどこに行こうが玉を拾えるスピードがある」

と、池松がバテて嘔吐く

よしのり「でも体力がないから意味がない。次」

仲世古兄弟が卓球台でプレイする

よしのり「仲世古兄弟。三年、雄先輩と二年、英のダブルス。雄先輩はドライブ主戦型でフットワークも軽い。英はシェーク異質型でトリッキーなプレイをするから相手はどう攻撃してくるかわからない。二人の戦型の組み合わせは悪くない。だけど―」

仲世古兄弟がお互いを邪魔する

よしのり「兄弟なのに相性が最悪」

雄「（急に体を上げそっぽを向いて）あ！女子」

と、タイミング悪く英のラケットが雄の頭に直撃する

雄「お前！お兄ちゃんの頭をスマッシュするな！」

英「女子見てたよな」

雄「見てたよ、かわいいんだもん」

英「女子は兄ちゃんの事廊下に転がる埃としか思ってない」

雄「言いやがったなお前！」

と、不意に飛んできた球を今度は絶妙な間合いで二人で察知して雄が打つ

雄「（伊勢川に）そもそも頑張ってほしかったらな、深田えいみ似のマネージャーの一人や二人連れてこい！」

英「明日香きららでもよし！」

よしのり「最後は、伊勢川部長」

伊勢川、渋々卓球台につく、淡々と球をはじいていく

よしのり「この部では戦術のバランスが一番良くて相手をしっかりと観察し丁寧に打っていく。ただ、いまいち自分から仕掛けきれない。相手に押されるとー」

伊勢川、足を下げる

よしのり「一歩後ろに下がる癖がある」

伊勢川、スマッシュを決められる

伊勢川「さすがだ、良く見てる」
細越「今更、こんな事始めても遅いんじゃないか」
伊勢川「始めないよりマシだろ。ほら鷹宮、お前もだ」
よしのり「え」
全員「打てよ」

よしのり、仕方なく卓球台の前に立ち構えるが

細越「（だるそうに）二年鷹宮よしのりぃ」
雄「（だるそうに）卓球がうまいんだか何だか知らないけどなんかいけすかねぇ」
英「このあいだぁ、同じクラスの女子と話してたぁ」
池松「プレイスタイルは、ナンパぁ」
よしのり「部長」
伊勢川「やめないでね」

と、田中が戻ってくる

田中「（呑気に）お前らちゃんとやったかぁ」
伊勢川「撤収」

一同が卓球台などを片づけていく。
以下、それを行いながらの会話

雄「（田中に聞こえないように）なぁ、ちゃんとした顧問がいれば済む話じゃないか」
伊勢川「だから鷹宮のお父さんをだな」
英「（二人だけの会話として）なぁよしのり、俺が言うこっちゃないけどほんとにこの卓球部でよかったのか」

よしのり「今更なんだよ」
英　「だって、中学の時お前らのチームは」
よしのり「前の事はいいんだよ」

あらかた片付けが済み、一同が田中の前に整列する

田中　「はい、それじゃあ、お待ちかね、練習試合の相手を言うぞー。えーっと、相手は、東高だ」
一同　「東高！」
細越　「そんな無茶な」
池松　「どんだけ強いと思ってるんですか」
田中　「だって東高、先生の家から近いんだもん」
雄・英　「そんなんで決めんな！」
伊勢川「あそこはインターハイ常連でなんて呼ばれてるか知ってるでしょ、‘魔王の軍団’です！」
田中　「（若干の間を開け呑気に）おー、つよそう」

細越、ラケットで田中を殴ろうとするが池松が何とか止める

田中　「決まったもんは仕方ない、終わったらファミレスで打ち上げだ！」

既に戦意喪失している一同

田中　「いいか！『高ければ高い壁のほうが登った時気持ちいいもんな』ってミスチルの桜井さんも言ってたよ！だから一生懸命やろ！・・・先生、帰ります」

田中、逃げるように去る

伊勢川「やばいよ、彼らの前じゃ、ウサギどころか鼠だ」
英　「（よしのりに）東高ってお前のお友達がいるチームだろ、隼人って言ったか」
細越　「本当か、全員分のお年玉で隼人くんに負けてくれるよう頼んでくれないか」
伊勢川「細越」
細越　「恥かいて終わりだよ」
雄　「深田えいみ似のマネージャーがいれば勝てるんだけどなぁ」
池松　「そんなもん強い部活だけにつくんだよ」
細越　「いても来年には部員が足りず廃部だ」

伊勢川　「女に手だしてる暇があるなら練習しよう」
細越　「伊勢川、練習も良いけど（手で幽霊を真似て）忘れてないだろうな」
伊勢川　「（あきれて）まじで行く気か」
細越　「逃げるなよ、裏山の入り口に集合な」
伊勢川　「本当に出るのか」
池松　「これは、裏山であった話だそうだ。（咳払いして雰囲気を作って）最近、この学校の女子の制服を着た王様の幽霊が何度も目撃されているらしい」
伊勢川　「なんだその変態は」
池松　「なんでも、呪文のようなものを唱えてるらしい、恐らく・・・なんだかんだあって呪ってる幽霊だろう」
伊勢川　「なんだかんだってなんだ」
池松　「（さえぎって）しかも恐ろしいのがその姿は―」
雄・英　「（歌うようにハモって）血だらけ」
伊勢川　「ハモらなくていい」
英　「よしのり、お前も行くだろ」
雄　「てか来い、もし襲われた時の生贄が必要だ」

雄と英が去っていき、その後ろを池松と細越が追う

伊勢川　「やめないでね」

伊勢川が小さい背中で去る、その後をよしのりが追う

×　×　×　×

Ｓ８　裏山・祠近く（夜）

西高卓球部員達の懐中電灯の明かりが見えてくる

細越　「全然怖くない、全然怖くない、全然怖くない」
伊勢川　「池松、今何回目だ」
池松　「１２１５回目」
伊勢川　「ラリーもそんくらいしてくれよな」
英　「怖がりすぎです」
細越　「怖くない。だって、幽霊つったってうちの生徒じゃん、同じ高校生仲間じゃん一緒にティックトック撮ろうぜ」
雄　「結局なにも出てこない」
英　「呼んだらでてくるかも」
細越　「呼ぶな、出てきたらどうすんだ」

伊勢川　「お前が行こうって言い出したんだよな。池松、呼べ」
池松　「幽霊、さーん！（細越指して）こいつと一緒にティックトック撮ろう！」
よしのり「・・・あれ」
英　「どうした」
よしのり「懐かしいな、あの祠」

全員が祠をライトで照らす

よしのり「小っちゃい頃、よく来たんだよ。昔の人が立てたらしくて、暗くなると不気味だから夜は近寄らなかったけど」
細越　「鷹宮君、やっと口を開いたかと思えばそんなこと言うなら口を閉じてなさい」
よしのり「あれ」
英　「どうした」
よしのり「何か聞こえないか？」
細越　「聞こえない、保健室行って来い」
池松　「ほんとだ」
細越　「おい」
伊勢川　「確かに聞こえるな」
細越　「（耳を抑えてるが気になる）なんて言ってる」
雄　「・・・マネージャーがほしい」
伊勢川　「それはお前だろ」
池松　「近づいてくる」
細越　「勘弁してくれ、もう帰ろう」
池松　「伊勢川どうする」
伊勢川　「・・・仕方がない」
雄　「生贄という名のお供え物の出番だ」
池松　「誰がやる」

伊勢川、細越、池松、雄、英がよしのりにライトを向ける

よしのり「退部します！」

と、雄が一人だけ何かの気配を一瞬感じて思わず驚き声を大きく上げる

伊勢川　「なんだ」
雄　「・・・なんかいる」

英　「逃げましょう」
池松　「（腰を抜かした細越を見て）ダメだ、細越が腰抜かした」
伊勢川　「・・・今までありがとう、楽しかった思い出と共に・・・さようなら」
細越　「行かないで！」

一同、細越を見捨て逃げようとする。
細越、必死に池松の足にしがみつく

池松　「離せ、別れ際の彼女か！」

一同が細越を引きはがそうとする。
と、頭に王冠、背中にマント、口に髭をつけた血だらけの女子生徒が立っている。顔は殆ど髪で隠れて見えない。
初めは誰も存在に気付かないがまず最初によしのりが目撃して思わず声をあげる。驚いた反動で無意識に自分の顔にライトを当てる。
伊勢川、その声に反応して暗闇に浮かぶよしのりの顔に驚き声をあげながらライトを振り回し光を雄にあてる。
雄、声に反応し、伊勢川の顔を見ると絶叫しライトを英にあてる。
英、振り返り雄の顔に驚き声を上げ、ライトを池松にあてる。
池松、同じように英の顔に驚きライトを細越にあてる。
細越が池松の顔に気づき一瞬驚く。が、池松の後ろの女子生徒が目に入る。
細越、奇声を上げながら指をさす。
指の方向にライトを女子高生に向ける一同。一斉に悲鳴を上げる。
完全に幽霊と確信した一同、仲間とか関係なくよしのりを女子生徒の方に放る。そして、去る

よしのり「（怖くて立ち竦む）・・・お供え物はラケットとピンポン玉でいかがでしょうか」

女子生徒、王冠に手をかける

よしのり「（怖すぎて）なんだったら、顧問の眼鏡もつけます」

と、女子生徒が堪えきれず吹き出し、王冠と髭を同時に取ると月子の顔

よしのり「月子？」
月子　「よぅ、なんでいんの」

よしのり「血だらけ女子高生の幽霊探し」
月子　「幽霊？（察して自分の姿に目をやり）あたしが」
よしのり「どうしてそんなややこしい格好」
月子　「女子高生版ハムレット。演劇部の練習」
よしのり「わざわざこんなとこでやるなよ」
月子　「雰囲気出ていいだろ、久しぶりに話すってのに機嫌悪いな」
よしのり「そんなんじゃないよ」
月子　「（若干の間を空け加減しながらも意地悪そうに）隼人がいるチームと戦うから？」
よしのり「・・・隼人に聞いたのか」
月子　「うん。あいつとも久々？」
よしのり「そりゃあそうだ、東高は常にシード組で西高は一回戦落ち。大会ではあたるわけがない」
月子　「なら中学ぶりか」
よしのり「・・・」
月子　「今度は勝てそう？」
よしのり「（おい、と顔を向ける）」
月子　「（笑ってるわけじゃないがおもしろがって）ごめん、わかってて聞いた」
よしのり「かわんないな」
月子　「よしのりは変わったな、前はまぁもう少しかっこよかった、気がする」
よしのり「・・・」
月子　「（ほんの浅ため息を漏らし）もう、飛ばないの？」
よしのり「・・・」
月子　「前はすごかったじゃん、卓球台あんなに狭いのにボールに向かってビュンビュン飛んでた」
よしのり「ドラゴンみたいに？」
月子　「（少し考え）ペンギン？」
よしのり「飛べないだろ」
月子　「でも、羽はふってた」
よしのり「・・・」
月子　「・・・あたし隼人に好きだって言われた」
よしのり「今言うなよ」
月子　「いいじゃん、高校に入ってからなかなか喋ることなくなったんだから。いろいろ話しても」
よしのり「それで？」
月子　「なにが」
よしのり「いや、返事」

月子　「（意地がわるそうに）気になる？」
よしのり「気にならない」
月子　「（面白がりながらも人の気持ちに関しては誠実に）返事はもう少し待ってって言った。あたしも部活の大会近いし、それにあんたと一緒で昔からずっと一緒だったからいきなり好きだって言われても、自分でもよくわかんない」
よしのり「・・・」
月子　「（仕切りなおすように立って）練習試合の後は（大袈裟に）インターハイをかけた大会でしょ（よしのりが何か言い出す前に）無理とか言わないでね、少しは根性出せペンギン」
よしのり「・・・」
月子　「それじゃあ、おやすみ」

月子、去る。
その背中の後を追うよしのり。
と、なにかひどく焼け焦げた匂いがよしのりの足を止める。
次第に男たちの「オー！」といった、關の声が祠の中からこもって響く。
よしのり、祠に顔を向けると真っ赤に光っている。
その瞬間、勢いよく祠の扉が開き大量の火が交じる煙が辺りを支配する。
よしのり、煙にむせて顔を腕で覆う。
やがて煙が消えてよしのりが顔をあげるとそこには、教科書で見た事がある殿様が刀を手に飛び出してくる

信長　「（奥から）光秀、光秀（飛び出て）光秀！」
よしのり「・・・」
信長　「（目があい刀を構えて）光秀はどこじゃ」
よしのり「・・・ハムレットならもう帰りましたけど」
信長　「誰じゃそやつは。貴様は誰じゃ！」
よしのり「西高の、生徒です」
信長　「何を分けのわからぬ事を、貴様もこの首を狙うか、やめておけ、長生きしたくば、さっさとこの本能寺から・・・・・・どこじゃここは」
よしのり「・・・あなたは、どなた様でしょうか」
信長　「（これ以上なく笑い）たわけ！誰がどう見ても、織田信長じゃ！」

×　×　×　×

タイトル「信長ピンポン　ＮＯＢＵＮＡＧＡ　ＰＩＮＧＰＯＮ！」

×　×　×　×

Ｓ９　全国中学校卓球大会・試合会場

中学時代のよしのりと隼人の試合。
隼人のサーブ。そこから試合がスローモーションになる。
隼人のスマッシュが決まる。立ち尽くすよしのり

隼人　「なんで来たんだよ、戦う気なんてなかったろ」
よしのり「・・・」
隼人　「まぁいい、お前は置いて行くから」
よしのり「(何とか構える)」
隼人　「もう遅い」

隼人、去っていく。
よしのりが追おうとするが何故か体が動かなくなる。
と、見えない球がよしのりに当たる

よしのり「隼人」

何発もよしのりの体にボールが当たり、一球ごとに後ろに下がっていく。
最後の一球の勢いで体が浮いて吹き飛ぶ。
更に何故かよしのりに向かって布団と枕、目覚まし時計、畳まれた学生服と
カバンが飛んで来て、ユニフォームのゼッケンは剥がれて飛んでいく。
やがて布団がよしのりに被さり、枕は頭の下に入り込み体ごと床に着地。
目覚ましは枕元に、学生服とカバンは寝ているよしのりの横に落ちる。
と、それらの勢いに紛れて刀を持った織田信長も飛んできてよしのりの
横に膝を立て腰を下ろす

×　×　×　×

S10　鷹宮家・よしのりの部屋（朝）
信長、じっとよしのりを見ている。
よしのり、しばらくして目を覚まして信長と目が合う

よしのり「なんだ、まだ夢か（何事もなかったかのように布団に戻る）」
信長　「・・・確かにこの世は夢幻、しかし光秀の奴め、寝込みを狙うとは漢の風上
にも置けん、良くも俺を！」
よしのり「(起きて) あの！ここはまだ夢の中です。何でしょう、その頭は、何でしょう
その刀は。はそんな物を持っているのはやばい人です、どうか遠く昔にお帰り
くださいお願いします！（寝ようとするが）」
信長　「無礼な、殿と呼べ！」

目覚ましが鳴る

信長　「合戦か！」
よしのり「（起き上がり）夢じゃない！」
信長　「やかましい！叩ききってやる！」
よしのり「（目覚まし時計を止める）」

と、部屋のドアの前に鷹宮「琴乃」。メガネをかけ、西高の制服を着ている

琴乃　「よしのり、ご飯」

信長がその声に即座に反応し琴乃の喉に刀の切っ先を向ける

琴乃　「まさか、あんたそんな格好で寝たの」
信長　「ここを殿の寝所と分かってぬかすか、女！」
よしのり「（信長に横目で）僕の部屋です」
琴乃　「（自分にと思い）生意気言うな」
信長　「（驚きゆっくり刀を話して）な、なぜ俺の刀を恐れない」
よしのり「・・・あなたは死んでるのでは」
琴乃　「あ？めちゃめちゃ元気にご飯作ってやったわ、（手に持ったお玉を向けて）それ以上寝言抜かせば父さんに言うよ」

琴乃が居間に向かい準備を始める

信長　「あの女、俺の姿が見えていないのか」
よしのり「・・・そりゃあ幽霊なら」
信長　「（信じられない様子だが笑って）まさか、化けて出たか！だが、ここはなんじゃ！おかしなものばかりが目にうつるぞ」
よしのり「そりゃあ、あなたがいた時代から５００年くらいたってますから」
信長　「５００年！」
よしのり「というか、本当に，織田信長．ですか」
信長　「織田、信長じゃ！」
よしのり「殿様ってのはみなさんそう声が大きいんですか」
信長　「あたりまえじゃぃ！蚊のような声で戦に勝てるか！」
よしのり「この時代に戦はない！」

信長　「なに！」
よしのり「この際、あなたが幽霊でもなんでもいいんだけど今はとにかく余計な事はなし！
　特に、父さんの前では」
信長　「この俺に指図するな！小僧、名は」
よしのり「よしのり、鷹宮よしのり」
信長　「おぅ鷹か！鷹は好きだ！あとで鷹を狩るぞ火縄を用意せぇ！」

×　×　×　×

S11　同・居間

琴乃がテーブルに朝食を並べて待っている。
各場所にみかんが用意されている。
よしのりがそこに座る。
と、信長、殺気を感じて途端に振り向く。
鷹宮「刀馬」が入ってくる。彼は勤務先の作業着を着ている。
よしのりが刀馬と琴乃に怪しまれないように信長に手で座るよう合図する

信長　「(癪だがひとまず応じて、座りながら) こ奴は誰じゃ」
よしのり「(ぼそっと) 我が家の，殿，です」
刀馬　「(よしのりをみる)」
琴乃　「父さんからも言ってよ、よしのり今日変」
刀馬　「琴乃、今日もご飯をありがとう。いただきます」
琴乃・よしのり「いただきます」

3人が朝食を食べ始める。
琴乃は野菜から、刀馬は味噌汁から、よしのりは卵焼きから手を付ける

刀馬　「(しばらくして、横目でよしのりを見て) 何か俺に隠しているのか」

よしのりの手が止まる。信長も思わず姿勢を正す

刀馬　「・・・試合か」
よしのり「(安心したいがしきれず) 練習試合です」
刀馬　「試合を区別するな」
信長　「誰かと戦うのか、わかったぞみつ―」
よしのり「(あくまで刀馬に) 東高」
刀馬　「(手を止めて) もちろん勝つんだろうな」
よしのり「無理です」

琴乃　「（刀馬の顔を伺って）嘘でも勝つって言っときなさいよ」
よしのり「あっちはインターハイ常連、こっちは―」
刀馬　「西高はお前が選んだ道だろ」
よしのり「・・・」
刀馬　「それに随分と他人事だな、チームじゃないのか」
よしのり「・・・」
刀馬　「勝ち以外この家に持ってくるな」
琴乃　「（逃げるように）ごちそうさまでしたぁ」

琴乃、皿を重ねて台所へ向かう。食べ始める刀馬

信長　「何を黙ってる！首の二百や三百、その皿の上に並べてやると言ってやれ！」
よしのり「うるさいな」
信長・刀馬「なに！／（よしのりに顔を向ける）」
よしのり「父さんのようにはなれないよ」
刀馬　「誰がそんな話をしてる」
よしのり「・・・」
刀馬　「（手を合わせ）ごちそうさまでした」

刀馬、皿を重ねて台所へと向かう。
よしのりは再び食べ始める

信長　「貴様がよぅわかったわ、腑抜けに腰抜け、根性なしの表六玉じゃ」
よしのり「（食べながら）俺もわかったよ、あなたはこの時代に向いてない。いちいちムカつきます」
信長　「ようやく気が合うたな」
よしのり「（箸を置き）ルールを作りましょう」
信長　「る、なんじゃって」
よしのり「掟のようなものです」
信長　「必要ない」
よしのり「ひとつ、人前で話しかけてこないこと。僕が変人に思われるから。ふたつ、単純にやばいんで刀を振り回したり奇声を上げたりしないでください、信長らしいことはしないように」
信長　「信長なのに？」
よしのり「みっつ、この時代にいる以上はこの時代のやり方に従ってください」
信長　「やり方とはなんじゃ」

よしのり「みんなあなたみたいな好き勝手言いたいことを言わないし、言えません。お殿様みたいな生き方はできないんです」

よしのり、立ち上がりカバンを肩にかける

信長　「どこへ行く」
よしのり「学校」

よしのり、首のヘッドフォンをつけ曲をかける

×　×　×　×

Ｓ１２　通学路

多くの車が道路を走っている。
よしのり、歩道を歩きその後ろに信長。
信長は初めて見る車に口が塞がらない

信長　「なんじゃあれは！鉄が人を運んでおる、馬はどうした」

×　×　×　×

Ｓ１３　駅のホーム

沢山の通勤者でごった返している。
そこによしのりと信長。
電車が停車して扉が開き人に押されよしのりとつられる信長が乗り込む

×　×　×　×

Ｓ１４　電車内

満員で押しつぶされそうになってるよしのりと何故か信長
しばらくして停車駅に電車がとまり降りる二人

×　×　×　×

Ｓ１５　西高・教室

よしのりと信長が入ってくる。そこに田中

田中　「はい、座れ、おーい、鷹宮遅いぞ」
信長　「(敵かと刀を抜く)」
よしのり「ルール！」
田中　「うるさい、誰と喋ってる。座れ」

席に座るよしのり。それにあわせて警戒しながらも刀をしまう信長

田中　「はい、教科、書（教科書開く）今日はみんなお待ちかね、本能寺の変だ。悲劇の主役はもちろん織田信長。舞台は１５８２年京は本能寺（説明が続いてる）」
信長　「俺の事を知っているのか！」
よしのり　「（ひそひそと）日本で知らない人はいません」
信長　「（気分良さそうに）本当か」
田中　「家臣であった明智光秀は信長を大変慕っていた為―」
信長　「そうだあの野郎！」
田中　「信長は腰が抜けるほど驚いただろうな」
信長　「そんなことはない、堂々と（足広げて）仁王立ちじゃ！」
田中　「光秀が何故、裏切ったかは５００年たった今もはっきりとは明らかになっていない」
よしのり　「（ひそひそ）寝込み襲われるなんてよっぽどな恨みですよ、本当に心当たり無いんですか？」
信長　「（笑う）ありすぎてわからん」
よしのり　「（ひそひそと）自業自得じゃないですか」
信長　「恨まれずに天下などとれるか」
田中　「ハイ、何か質問ある奴いるかぁ」
信長　「（手上げて）先程、火災保険と言う文字を町で見かけたのだが、５００年経った今でもきくだろうか」
よしのり　「きくわけないだろ、いつのまにそんなこと―」
田中　「おい、鷹宮。誰と喋ってる」
よしのり　「試合の練習です」
田中　「おしゃべり卓球禁止」
信長　「おい、卓球とはなんじゃ」
よしのり　「・・・（ぼそっと）ちっちゃな、戦」
信長　「やはりあったのか！武器は何を使う、刀か槍か薙刀か」
よしのり　「（ぼそっと）ラケット」
信長　「ら・・・おい、小僧。お前が寝言で言っていたインターハイとはなんじゃ」
よしのり　「・・・天下を獲れる戦」

チャイムが鳴る

田中　「（教科書を閉じて）はい、それじゃあ次週は光秀を中心に授業するからな」
信長　「（なに、と田中に指さしながらよしのりに目をやる）」
田中　「それから卓球部すぐに体育館集合だ。逃げるなよ」
信長　「誰が逃げるものか、なにをしてる、早よ甲冑を用意せぃ！」

田中が去る。
再び生徒同士の会話が始まり騒がしくなる。よしのりが制服からジャージに着替える。
と、同じクラスの英が近づく

英　「よしのり（グーサイン）今日も何かあるってよ」
よしのり「（途中グーサインを返し）やる気ないくせに次から次へと」
英　「よりによって相手がなぁ。逆にお前はいいか、リベンジ出来て」
よしのり「無茶な」
英　「お前だけだろ、少しでも希望が残ってんのは」
よしのり「英、俺はそうは思わないよ」
英　「ん」
よしのり「みんなだってその気になれば。部長もそれを信じてる」
英　「・・・まぁ、個人戦はともかく一回くらいチームで勝ちたいよな」

×　×　×　×

S16　同・体育館（夕）
西高メンバーが集まる。そこに田中のスキップ

細越　「あ、やばいな機嫌がいい」
田中　「今日は飛び入りゲストが来ております」
雄・英　「いやな予感がする」
田中　「なんと今度練習試合をする、東高校卓球部の部長さんが見学に来てくれました！」

田中が拍手で煽る。
と、「最上（もがみ）」大輔が入ってくる

最上　「（とびっきりの笑顔で）突然お邪魔してすいません。東高等学校卓球部部長、最上大輔です。普段はこのような見学などはしておりませんが初めてお相手する方々なのでどのようなチームなのかを知っておきたく無理は承知で田中先生に練習の見学をお願いしたところ、快く承諾して頂きました。カメラの方を回させていただきますが邪魔は一切いたしませんので、何卒宜しくお願い致します！」
伊勢川　「部長の伊勢川です、こちらこそよろしくお願いします」
最上　「（手に持ったものを差し出し）もしよかったらこれ」
田中　「（受け取り）それじゃあ先生、練習が終わった頃にまた来るから」

田中、去る。
最上がどうぞと伊勢川に笑顔を向ける
伊勢川　「（一同、ノリ気ではないが）それじゃあ、始めよう。いつも通りラリーから」

最上がカメラをの蓋を開く。
一同が練習を始めると最上がそれをくまなく映していく。
その途中、よしのりに信長が近づく

信長　「これはおもしろい、相手の陣地に一撃お見舞いしてやればいいんだな」
よしのり　「（言葉は出さずにそうだと顔で返事をする）」
信長　「振っている面妖な板はまるで刀じゃ。突くかいなすか叩き斬るか、如何に相手の頭を読みその刀でねじ伏せる。これが卓球か」
よしのり　「（ぼそっと）僕にのり憑って代わりに出ますか」
信長　「いいのか」
よしのり　「いいんですか」
信長　「冗談じゃ、これはお前らの戦だ」
よしのり　「・・・」
信長　「（英を指差し）お主の言う通りかもしれんのぅ、確かに腕が一番あるのはお主だが他の者達も戦いの筋はいい」
よしのり　「（彼が認めるとは思わず信長に顔を向ける）」
信長　「とはいえ、戦の上で必要なものを誰一人と持ってはおらぬ」
よしのり　「・・・」
信長　「それを心に携えさえなければ待っているのは敗北のみじゃ」

よしのりが彼らを見渡す。しばらくして、練習が終わりカメラを閉じる

伊勢川　「それじゃあ、今日はここまでにしよう」
最上　「（ニコニコ）皆さん、今日はありがとうございました、とても有意義な時間で来週の練習試合が楽しみになりました。公式戦ではないけれどこちらも全力で戦わせていただくのでどうかよろしく。それでは、東高で待ってます」
一同が解散していく

×　×　×　×

Ｓ１７　同・廊下―校舎前
日が暮れ始めている。
最上、電話を取り出しかける

最上　「もしもし最上です、はい、これからさっそく相手の癖やパターンをチームの皆で分析しようと思っています」

廊下に伊勢川と細越

細越　「強いチームの部長なのに思ってたのと違ったな、怖そうな人かと思ったよ」
伊勢川　「（しっかりと目を見て）知らないのか」
細越　「なにが」
最上　「西高は確かに経験もスキルもうちと比べたら低いかもしれませんがどんな相手でも油断はしません」
伊勢川　「あの人が何て呼ばれてると思う？」
最上　「どんなチームでも必ず牙が隠れてる。彼らがそれを使うかはわかりませんが。なのでいつも通り確実に―」
伊勢川　「愛想のいい―」
最上　「（今までの笑みは消えて）打ち殺す」
伊勢川　「殺し屋」

最上が携帯を切り去る。
伊勢川、細越も去る。
電車の音が響く

×　×　×　×

S18　駅・ホーム―車内
電車が到着する。扉が開くとよしのりと信長が電車に乗り込む。
扉が閉まりきる直前で隼人が乗り込んでくる。
よしのりが先に隼人を見つける。
息切れした呼吸を整え隼人が顔を上げると彼もよしのりが目に入る

隼人　「よう」
よしのり「おう」

二人が横並びでつり革を掴む。
隼人、前の空席に目をやる

隼人　「座れば」
よしのり「大丈夫」

信長、二人の間に挟まるようにしてシートに座る

よしのり「今日、そっちの部長がこっちに来たよ」
隼人　「知ってる」
よしのり「魔王の軍団のリーダー自ら平民の畑に視察に来るとは」
隼人　「・・・」
よしのり「不思議だよ、東高みたいなチームがうちとの練習試合なんか引き受けるなんて」
隼人　「（よしのりをちらっと見て窓の外に視線を戻す）」
よしのり「なんだよ」
隼人　「お前変わったな」
よしのり「（嫌気が差したため息と一緒に）またそれか」
隼人　「ん」
よしのり「月子に言われた」
隼人　「・・・」
よしのり「お前にコクられたことも」
隼人　「・・・あいつなんか言ってたか」
よしのり「・・・別に」

と、電車が停まり車内「アナウンス」

アナウンス「停止信号ですしばらくおまちください」
よしのり「・・・月子、ちゃんと考えたいとは言ってたよ」
隼人　「そうか」

しばらくどちらにとっても気まずい沈黙

隼人　「・・・あいつ可愛いよな」
よしのり「・・・高1から急に変わったよな」
隼人　「その前から可愛いよ」
よしのり「あ？知ってるわ」

再びそのような沈黙

隼人　「お前はどうなんだよ」
よしのり「（勘ぐられないように）なにが」
隼人　「卓球だよ。もうやんないのか」

よしのり「やってるだろ」
隼人　「本気でだよ」
よしのり「・・・」
隼人　「やっぱりまだー」
よしのり「もうそれはいいんだ」
隼人　「・・・」
よしのり「勝つ為の卓球はもうしてない」
隼人　「・・・そうか」
よしのり「・・・」
隼人　「うちが試合を受けたのは俺がコーチに頼んだからだ」
よしのり「（思わず隼人を見て）」

と、電車が動き出す

アナウンス「お待たせいたしました出発します」

×　×　×　×

Ｓ１９　帰り道

池松、雄、英が歩いてくる

池松　「そいつとやってクソ漏らして逃げたのか」
英　「その試合がきっかけであいつも東高に推薦もらっていたのにそれを蹴ってまで西高に来たって聞きました」
池松　「いつの間に仲間に差をつけられて試合でコテンパンってのは、まぁ、良くある話か」
雄　「それで？」
英　「それ以上は聞いてない」

池松の足が止まり

雄　「どうした」
池松　「数日後には俺たちがクソを漏らすハメになるかもな」
雄　「（英に）替えのパンツ用意しとくか」
池松　「俺は飽きたよ、ケツを拭くのは」
雄　「・・・じゃあ、あいつらに勝てるくらい苦痛まみれのトレーニングをしたいか」
池松　「・・・（雄の目の前まで移動して堂々と）それは違う」

池松、去っていく。
雄がなんとなく安心したように英に目を合わせ後を追う。
英、なんとなく寂しそうに後を追う

×　×　×　×

Ｓ２０　車内
電車が駅に到着する

隼人　「まだ待ってる」
よしのり「・・・」

電車の扉が開く

隼人　「もし気が変わってやる気がでたら、全力で来い」

隼人がホームへ降りる。そして、扉が閉まる

暗転

Ｓ２１　鷹宮家・玄関（朝）数日後。
よしのりが靴を履いている。その横で信長が刀を降っている

よしのり「どうしてあなたが気合を」
信長　「お前こそ何を悠長に構えておる、今日は生きるか死ぬかの日じゃ」

と、部屋着の琴乃が弁当を持って来る。弁当の包みからはみかんが覗く

琴乃　「はい、（渡す）コテンパンにされて吐くなよ」
よしのり「父さんは」
琴乃　「いつもの」
信長　「なんだ」
よしのり「（あくまで琴乃に）勝負事になるといつも部屋に籠城」
琴乃　「自分が戦うわけじゃないのに誰よりもピリついちゃって」
よしのり「仕方ないよ、父さんが認めるのは勝ちだけだから」
琴乃　「でもいいじゃん、あんたは戦うもんがあって」
よしのり「え」
琴乃　「（なんでもないと）あたしも今から受験が怖いわ」
よしのり「姉貴は大丈夫だよ、（弁当軽く持ち上げて）ありがとう、行ってきます」

よしのり、ヘッドフォンをつけ曲をかける
×　×　×

Ｓ２２　街
よしのりと信長が歩く
×　×　×

Ｓ２３　細越家・洗面台
細越がすごい勢いで顔を洗いタオルで拭く
×　×　×

Ｓ２４　池松家・同
眠気眼で池松が歯磨きをしている
×　×　×

Ｓ２５　中世古家・雄と英の部屋
兄妹が片足を上げてズボンを脱ごうとしている。途中、同時によろけ突撃して、倒れる
×　×　×

Ｓ２６　伊勢川家・自宅

伊勢川がラケットをラバークリーナーで磨く

×　×　×　×

Ｓ２７　貝原家・月子の部屋

部屋着の月子が携帯でメッセージを送る。

それが街を歩くよしのりに届く。

よしのりが携帯の振動に気づいて携帯の画面を開く。通知の相手の名前に思わず驚きヘッドフォンを外し首にやる。

信長、覗く。

以下の会話はメッセージ上のものである

月子　「（打ちながら）おはよ、今日、練習試合でしょ、頑張って（送信）」

よしのり「（打ちながら）珍しいな、そんなんで連絡くれるの、何かあった？（送信）」

月子　「（打ちながら）バレたか、実は相談があって（送信）」

よしのり「・・・（打ちながら）隼人のこと―（取り消して）相談か、なに？（送信）」

打ち込んでいく月子。

よしのり、しばらく連絡がなく気になり何度も携帯を確認する。

と、通知音が来てすぐに画面を開くよしのり

英　「（打ちながら）試合前にズボンが破けました」

雄が英に近づき

雄・英　「兄弟で」

雄と英が後ろを向くと破けたズボンからパンツが覗いてる。

英、その写真を送る。

よしのり、あまりに腹が立ち携帯を高く上げて地面に叩きつけようとする。

が、通知音

月子　「（打ちながら）ＬＩＮＥじゃなくて会えない？暇な時（送信）」

よしのり「・・・（打ちながら）解散してからで良ければ今日でも（送信）」

月子　「（打ちながら）随分と余裕だな、でも、いいならお願いします（送信）」

よしのり「（打ちながら）了解（送信）」

月子　「（打ちながら）ありがとう、とりあえず今日頑張って（送信）」

よしのり「（打ちながら）おぅ（送信して携帯をしまう）」
信長　「（なんとなく嬉しそうにしているよしのりを見て）もう抱いたのか」
よしのり「（あまりの質問に言葉が出ず）」
信長　「何を慌てることがある。男は女を喰らって強くなり女は抱かれて艶が出る。お前くらいの年の頃はとにかく肉と女を（食えぃ！）」

よしのり、聞かずに街を進む

×　×　×　×

Ｓ２８　東高等学校・体育館（以下、東高）

よしのりと信長が入ってくる。そこに隼人

隼人　「一番のりだ、さてはやる気が出たな」
よしのり「・・・」
隼人　「丁度いい、話があるんだ」
よしのり「二人してなんだよ」
隼人　「ん」
よしのり「話って」
隼人　「というよりも、お前にじゃなく、信長さんに」
よしのり「・・・」
隼人　「よしのり、隠しっこなしにしよう（信長に目を合わせる）」
信長　「・・・お主、何者じゃ」
隼人　「話があるのは俺じゃない。こないだ、会った時見えたんだ。だから教えた」

信長、気配を察し刀に手を触れる。
明智光秀が姿を現す

信長　「光秀」
光秀　「お久しゅうございます、信長―」

信長、光秀が言葉を言い切る前に刀を一瞬で構え―

信長　「（よしのりに）許せ」

信長が刀を抜き光秀に斬りかかる。
光秀、それを予測していたのか軽くいなし、鞘から自分の刀を半分だけ抜き、
信長の刀を受け止める

光秀　「今更、殺りあっても無駄なこと」

光秀が信長を押し返し、刀を収める

信長　「黙れ、貴様が何故ここにいる」
よしのり「隼人」
光秀　「猿に首を斬られたかと思えばこの世に流れ着いた。彷徨っていたところをこのわっぱが。（信長に）あなたも同じようなものでしょ」
信長　「何故、地獄に堕ちずにいるかがようやくわかったわ、（刀を向け）この為じゃ、猿の次は俺がその首を飛ばす！」
光秀　「蘭丸は」
信長　「（笑って威張り）お前も詰めが甘い、逃がしてやったわ！」
隼人　「これで満足か」
光秀　「ああ。十分だ。そなたたちの邪魔はせぬ、存分に戦ってくれ」
信長　「冗談じゃない、さっさと刀を抜け。（よしのりに）なんとしても勝て、さもなくばお前に憑って叩き斬る」

と、西高の部員が入ってくる

伊勢川　「失礼します」
細越　「おい、なんだよ、もうバチバチか」
隼人　「’僕らは’平気ですよ、（よしのりに）な」
英　「（伊勢川に）そいつがよしのりと中学で」
雄　「（鞄の匂いに気づき）ん？いい匂いするな、弁当か、しかも女が作った弁当だ！」
池松　「恥ずかしい、帰れ」
雄　「いいなぁ、深田えいみがいればきっと作ってくれる」
伊勢川　「一回深田を忘れろ。（恥ずかしそうに隼人に）騒がしくてごめんよ、試合はもちろんしっかりさせてもらうから」

と、奥から最上の声がする。
見学の時とは違って威勢がよく張りがある

最上　「（声）遅くなってすまない！」

と、最上とその後ろに東高のレギュラーメンバーが並んで入って来る。
「伊達」倉夫（3年）、

「朝倉」道時（３年）、
「亀井」誠也（３年）、
「蜂須賀」新祐（３年）

池松　「あれが東高卓球部」
細越　「伊勢川、あの部長みたいに他の連中にもわけわかんない異名があるのか？」
伊勢川　「（伊達を指さして）三年、伊達倉夫」

イメージの中で伊達がプレイする

伊勢川　「お前と同じ速攻型だが武器は何といってもパワーだ、どのコースからでも強力な力でねじ伏せる。異名は卓球台の、戦車」
伊達　「スパコーン！！どうせ死ぬから死ぬ気でかかってこい」
細越　「戦車とは戦えません」
伊勢川　「（朝倉を指さして）三年、朝倉道時」

イメージの中で朝倉がプレイする

伊勢川　「試合によってペンかシェイクを変えてくる厄介な選手でどんな不利なポジションに打たれても粘っこく打ち返してくる、バテたら最後、容赦なく突いてくる。異名は執念に愛された死神」
朝倉　「いくら返そうが沈むのはそっちだ（タロットカードを出し）なぁ、カードたちよ」
池松　「カードってなに」
伊勢川　「（亀井と蜂須賀を指さして）亀井誠也、蜂須賀新祐の三年コンビ」

イメージの中で亀井と蜂須賀がプレイする

伊勢川　「亀井は正確なショットでミスを抑え、攻撃の要は蜂須賀の予測不能の動きだ、なんでも中学時代まで新体操をやっていたらしい。亀井が相手を崩し蜂須賀がとどめを刺す理想のコンビネーションだ、それでついた異名が、卓球雑技団」
亀井・蜂須賀　「アクロバティック！」
雄・英　「競技違くない？」
伊勢川　「それから（隼人を指さして）向井隼人、東高レギュラーで唯一の二年だ。（よしのりに）鷹宮、中学の時の試合見たよ」
よしのり　「・・・」
伊勢川　「お前が逃げ出したのもわかる、二年であれは化け物だ。ついた異名は卓球台のテ

クニックプリンス」

最上　「みんな挨拶」

東高卓球部「おはようございます！」

と、東高側からドリンクホルダーが入ったカゴと資料が入ったファイルを手に持つ女子生徒が入って来る。篠塚「由衣」。
スタイルが良く、まるで、雄の頭の中の理想が目の前に出現したよう

由衣　「マネージャーの篠塚由衣です、遅くなってすいません」

雄　「（声を低くして）かまいません」

雄の目には由衣に後光が差しているように見える

雄　「見ろ、我々の願望の全てがそこに」

伊勢川　「お前のだろ」

最上　「先生は」

由衣が顔を向ける。
奥から「畔木（くろき）」功が入って来る。しっかりとした服装をしておりこれから来る男とは比べ物にならない清潔感がある。首からホイッスルをぶらさげている

畔木　「畔木です、本日はよろしく。そちらの田中先生は」

と、呑気に田中が入って来る

田中　「今来ましたぁ、東高の皆様、西高顧問の田中です」

東高卓球部「よろしくお願いします」

畔木　「（田中に）こちらの主導で構いませんか」

田中　「もちろんもちろん」

畔木　「最上、ウォームアップだ」

最上が声をかけて体幹トレーニングや筋トレなどの人間であれば絶対にやりたくないメニューを東高主導ではじめる。
トレーニングのペアは、伊勢川と最上、
細越と伊達、

池松と朝倉、
雄・英と亀井・蜂須賀、
よしのりと隼人

田中　「さすが最強東高だ、まさかお受けいただけるとは」
畔木　「どうしてもという選手がいたもので。（由衣に）終わったら声をかけてください」
田中　「やっぱり厳しそうな人だ」
由衣　「（こそこそと）魔王ですから」

田中がそれでかと納得して生徒たちに顔をやる。
細越が伊達に足を持ってもらい、東高特有の腹筋を行っている

細越　「いつもこんな苦行を・・・？」
伊達　「（細越を抑えながら）いつもはこの４倍さ（絶句している伊達を抱きしめて）一緒に頑張ろう」

池松と朝倉が東高特有の背筋をしている。池松はついていけていない

朝倉　「がんばって！」
池松　「がんばってます」
朝倉　「あとすこし！」
池松　「さっきから言ってます」
朝倉　「あと５回！４、３、２、１、１、１、１、２！」
池松　「助けてくれぇ」

亀井、蜂須賀が雄と英に彼ら独自のトレーニングを教えている

蜂須賀　「君たちバク転はできるかい」
雄　「僕たち卓球部なのでできません」
蜂須賀　「空中で２回転半は？」
英　「ここだけサーカス部なのですか」
亀井　「蜂須賀お前にしかできないことはやめろ、（英に手を向けて）相手のことを知るにはこれが一番だ。一度卓球のことは忘れて（手を広げ）僕と社交ダンスをしよう」

亀井、徐々に近づいて雄と英が徐々に離れていく

雄　「（由衣を指さして必死に）あ、あの人と踊ります！」

由衣がそれに気づくが何もなかったかのように顔をそらし亀井に捕まる雄。
最上と伊勢川は普通のストレッチをしている

伊勢川「最上君はすごいな、みんな部長としての君を慕ってる、強いチームだとー」
最上　「そういうのはやめよう」
伊勢川「え」
最上　「始めから降参しているように聞こえるよ、君たちは勝つ為に来たんだろ」
伊勢川「・・・」
最上　「僕たちもそのつもりだ。篠塚、コーチを呼んできてくれ」
由衣　「はい」
最上　「遠慮なんかせずお互い自分たちの卓球をしよう」

よしのりと隼人もストレッチしている。
双方のそばに信長と光秀。信長はずっと隼人を睨んでる

よしのり「なぁ、プリンス」
隼人　「次、それで呼んだらラケットで殴るぞ」
よしのり「かっこいいのに」
隼人　「（信長が近く）よしのりお前から言ってくれ、集中できない」
よしのり「５００年の恨みがあるからな」
隼人　「俺は関係ないだろ」
よしのり「・・・なぁ、どうして余計なことを頼んだんだよ」
隼人　「ん？」
よしのり「こないだ言っただろ、うちとやるようコーチに頼んだって」
隼人　「それが余計な事か」
よしのり「（聞こうが迷うが）どうして俺にかまうんだよ」
隼人　「・・・」

と、由衣が畔木を連れてくる

畔木　「こちらで対戦の順番を決めさせて頂きました。それから今回は特別に勝敗が途中で決まったとしても試合は最後まで続行します。よろしかったですね」
田中　「どうぞどうぞ」

畔木　「各チーム、準備を」

一同が準備を始める。畔木が隼人に近づいて話す

畔木　「向井、本来なら彼らの為に足を止めてやる義理はない。お前達は追われる身だ。それを忘れるな、役目を果たせ」

隼人　「はい」

伊達が心配して隼人を抱きしめる

伊達　「大丈夫か、気にするな。俺たちが味方だ」

隼人、感謝しつつも離れる

亀井　「鷹宮くんだっけ？久しぶりなんだろ、楽しめよ」

蜂須賀　「鷹宮君はバク転はできるのか」

亀井　「（よしのりを指し）絶対聞くなよ嫌われるから」

伊達　「初めて戦う相手だからどんな連中かと思ったけどなんだか楽しそうでいいな」

隼人　「すいません、僕のわがままで」

最上　「なに言ってる、この部でしたいことは何でも言え」

朝倉　「とはいえ向井、お前を占ったら（カードを出す）逆位置で女帝のカードが出た。意味は我慢、感情的。軽はずみなプレイは命取りだ、気をつけろ（それを隼人に）」

伊達　「（それを朝倉に返す）そんなもんもってくんな」

最上　「とにかく、相手が誰であろうが油断はなしだ、いいな」

伊達　「ダメだ。初めからフルパワーでスパコーンだ」

蜂須賀　「同じく」

最上　「みんな、コーチが言ってたぞ、勝ったら肉だ」

一同が一斉にやる気を出す

畔木　「それじゃあ始めましょう」

それぞれのチームが列になって向かい合う

畔木　「西高等学校と東高等学校の練習試合を始めます（笛を吹く）」

一斉に挨拶し畔木が笛を吹く。
第一試合の最上と伊勢川が卓球台につく。
そのタイミングで田中が携帯のカメラを回す。
□　□　□　□

第一試合
伊勢川対最上。
伊勢川のサーブで試合が始まる。
最上が圧倒的な強さで伊勢川を攻める。
以下、試合中の会話

細越「ダメだ、全然ついていけてない」
雄「完全に動きを読まれてる」
由衣「資料通りです。攻められると思うと一歩下がる」

伊勢川が足を下げる

由衣「かえってそこを突かれる」
畔木「最上の卓球はまるでチェスだ。相手がどうこようが十手いや、百手を考えて打つ」
○　○　○　○

イメージ1
最上と伊勢川がチームのメンバーをチェスの駒に見立てて、それぞれ動かしていく。動かすたびに卓球のショットの音。
最上が次々と先を読み伊勢川の駒を倒していく。
やがて、残る駒は伊勢川のみ。
最上の駒が伊勢川を攻撃。それと同時にスマッシュの音が響く
○　○　○　○
最上が試合に勝ち、下がる最上

細越「大丈夫か」

伊勢川があまりのショックに言葉が出ず下がっていく
□　□　□　□

第二試合
細越対伊達
伊達がサーブ。

あまりのスピードに返せない細越

英　「今のは砲弾か」

試合が続く。
細越、自分のプレイが出来ず次第にイラつき始めポイントをとられ
声を出す

池松　「（つぶやくように）落ち着け」
畔木　「情動的だな」
由衣　「選手のタイプとしては似てるけど試合中のメンタルのコントロールが他の選手より苦手みたいです。それに伊達君がつられないといいけど」

伊達がポイントを取り獣のように声を上げる

畔木　「あれが揺らぐたまか」
由衣　「それもそうだ。まるで力比べみたい」

○　○　○　○

イメージ２
伊達と細越が服を脱ぐ。
両者、駆け寄ってお互い譲らぬ負けず嫌いな殴り合い。
殴る度に卓球のショットの音。
どちらも倒れぬが、伊達はびくともしていない。
決着がつかず腕相撲が始まる。
細越が力を振り絞る。
伊達、ニヤリとしやがて、試合を決めるスマッシュの音と共に細越の腕を、
倒す

□　□　□　□

第三試合
雄、英対亀井蜂須賀。
亀井が確実に返し蜂須賀はまるで曲芸かの様に舞う。
雄、英はなかなか息があわずポイントを決められていく

朝倉　「あの二人、兄弟なんだよな」
伊達　「どうやったらあんなにバラバラになれるんだ」
由衣　「兄弟なのに息が合わない」

畔木　「そう見えるか？」
由衣　「違うんですか」
畔木　「息があわないであんなに足を引っ張り合えるなんて考えられない」
由衣　「（難しく）それなぞなぞですか？助け合えるのに」

○　○　○　○

イメージ３

亀井と蜂須賀が卓球台を魔法で浮かべて分裂させて雄と英に飛ばしていく。
その度に卓球のショットの音。
何とか逃げる兄弟だが協力し合わない為、追い詰められる。
やがて、スマッシュの音と共に卓球台が直撃する

雄　「俺たちはハリーポッターと試合をしてるのか」

○　○　○　○

雄と英が下がる

最上　「朝倉、今日はどっちでいく」
朝倉　「そうだな、カードによれば（カードを伊達に飛ばす）正位置で戦車。意味は勝利と（ペンのラケットを持って）迅速だ」

□　□　□　□

第４試合
池松対朝倉。
朝倉はペンで強烈なドライブを打っていく。
池松、なんとか返していく。

伊達　「意外としぶといな」
最上　「いや、見てろ」

と、ポイントを取られた池松がえづく

由衣　「カットマンなのにバテるのはや」
畔木　「惜しいな、ショットの正確さやフットワークの良さはかなりいい。あれにスタミナがあればな」
由衣　「根性出せよ」
畔木　「一人一人の技術は磨けばいいものになる。だが全員にこびりついた共通の錆が見える」
由衣　「なんですか」

畔木「怠慢だ」
由衣「要はさぼりにさぼってきたのか」
畔木「そこらの連中じゃ真似できない程逃げてきたのが目に浮かぶ。彼もスキを突かれるのも時間の問題だ」

○　○　○　○

イメージ４
朝倉、死神のケープを被り大きな鎌を握る。そして、池松を鎌を振りながら追いかける。振る度に卓球のショットの音。
池松、逃げ足は速いが体力がなくなり足を止める
朝倉がすかさず鎌を振り池松を斬り、スマッシュの音が響く

○　○　○　○

朝倉がポイントを決めて試合が終わり、朝倉、池松下がる

由衣「そして最後は」

よしのりと隼人が卓球台の前に立つ。
それぞれのうしろに信長と光秀

光秀「今は彼らの戦い、我々が水を差すのはやめておきましょう」
信長「寝込みでなければ勝てぬか腰抜けめ、黙って刀を抜け」

光秀が一瞬抑えるが我慢できず刀を抜く。隼人がラケットを構える

信長「それでいい、（よしのり）お前もじゃ」

□　□　□　□

第５試合
よしのり対隼人
隼人のサーブから試合が始まる。
戦局はほぼ互角のように見えるが次第に隼人が優位になっていく。
これに合わせ信長と光秀が戦闘を行う。
以下、戦闘中の会話

信長「謀反とはお前にしては思い切った、一手だな」
光秀「腹が減ったんです」
信長「なに」
光秀「あなたにはわからぬこと。信長様、本能寺が私の最後の一手です」

信長　「俺の首じゃ、腹壊したろ」

光秀が斬りかかる。同時に強烈な隼人のスマッシュ。
信長が光秀の刀を受ける。
ラリーは続くがよしのりの劣勢になっていく

信長　「（よしのりに）なにをしてる！」

と、光秀が隙を狙う。かろうじて寸前で避ける信長

光秀　「何故あなたはその少年に憑くのです、戦う覚悟がない者に」

しばらく続く試合と戦闘。
まるで試合の優劣が戦闘の戦局に連動していくかの様に信長が不利になる。
やがて、隼人の最後のスマッシュと光秀の一振りが同時に出される。
隼人のポイントが決まり、光秀の刀の切っ先が信長の首前で止まる

光秀　「おわかりでしょう、信長様。亡霊である我々が生きてるこの者達の世にいつまでも縋れるわけがない。消えるのは明日か（鼻で笑って）また５００年後か」

信長　「・・・」

光秀　「どちらにせよ待つだけだ、この魂が決着をつけるその時まで」

光秀が刀を納め、隼人もラケットを降ろす。
東高チームが勝利を喜ぶ

由衣　「よかった、今日も勝てた」

畔木　「ああ、これでいい。（全体に）それでは―」

と、隼人がいきなりよしのりに掴みかかる。
様子をうかがうように信長が、刀を納める。
お互いのチームが一斉に二人に駆け寄り東高が隼人を抑える

由衣　「ちょっと」

田中　「止めなくて大丈夫」

由衣　「え」

田中　「（畔木に）よろしいですね」

畔木が若干の間を持ちつつも了承し、一同に目をやる

隼人　「よしのりお前」
よしのり「なんだよ」
最上　「向井、離せ」
蜂須賀　「珍しい奴だな勝ったのに」
隼人　「どうしてそうなる」
よしのり「だからなにが」
最上　「向井」

と、隼人が体から力が抜け最上達に大丈夫だと離れる

隼人　「(よしのりに) わかったよ。(しっかりと整えた息で) お前はもう置いてく」
よしのり「・・・」
畔木　「(よしのりに) 怪我はないか。田中先生、チームのコーチとして教育が行き届いておらずそちらの選手を傷つけてしまいました。大変申し訳ありませんでした」

畔木が深く頭を下げる

田中　「いえいえ、うちにとっても勉強になった日でした。みさなんどうもありがとうございました。それじゃあ、撤収」

それぞれ散らばっていく。畔木が隼人の前へ立つ

畔木　「来い」

畔木が去り隼人がついていく。
伊達が隼人を抱きしめにいこうとするが朝倉に止められる。
最上の合図がかかり西高部員が去る

田中　「みんなお疲れ様。いやぁ、完敗だ」
伊勢川「(何かを言おうとするが)」
田中　「ここからは、君たち次第だ」

一同がなにも返さず立っている

田中　「先生、お腹減った。ファミレスで打ち上げだ、一人７００円までな！」

田中が去り、一同去る。
と、よしのりも去ろうとするが信長が刀を向ける

よしのり「なんだよ」
信長　「迷いがある者に戦場に立つ資格はない」
よしのり「・・・」
信長　「わからぬか、負けるということはなくすということだ。家族や家来、なにより自分の魂をだ。お前の敗北はお前だけのものだと思うか。戦う気がないのなら刀は抜くな」
よしのり「そっちとこっちを一緒にするなよ」
信長　「知ったことか、あるのは勝ち負けだけじゃ」
よしのり「それならそっちだって同じだ。光秀さんに裏切られていつまでもうじうじと、立派な負けだろ」
信長　「生意気なことを抜かすな！それと光秀にさんはつけるな！」
よしのり「俺たちはきっと負け犬同士だから出会ったんだ」
信長　「（貶すように笑い）一緒にするな。お前は戦ってもおらぬわ」

信長、それ以上何言葉は無く去っていく。
よしのり、去ろうとする。
と、由衣がひょっこり顔を覗かせる

由衣　「ちょい」
よしのり「（なんですかと顔を向ける）」
由衣　「あんな向井君初めて見た」
よしのり「・・・」
由衣　「ものすごい余計なお世話なのはわかってるんだけど、彼が誤解されないように」
よしのり「・・・」
由衣　「鷹宮君が本気で卓球をしなくなったのは自分のせいだって言ってた」
よしのり「・・・」
由衣　「中学の時の最後の試合からそれがずっと心に隠れてたみたい」
よしのり「そんなのおかしいよ、俺が勝手に逃げ出しただけです」
由衣　「今も変わらず仲間だって思ってるからじゃない？」
よしのり「・・・」

由衣　「だからこそ、鷹宮君にはガツンてぶつかってほしかったんじゃないかな」
よしのり「・・・」
由衣　「まぁ、そんな感じ。あ、私が情報垂れ流したのは秘密。うち、厳しいから」

と、床に置き忘れたタオルを取りに戻ってくる雄

由衣　「（よしのりに軽く触れて）じゃあまたね、応援してる」

由衣、去る。
よしのりが去ろうとするが雄を見つけ止まる。
雄、嫉妬に狂い去っていく

×　×　×　×

Ｓ２９　街（夕）
月子が待ち合わせ場所にいる。そこによしのり

月子　「よぅ」
よしのり「おぅ」
月子　「（身構え）近づくな、負のオーラが見える、それでセリフが飛びそう」
よしのり「俺のせいにするな」
月子　「お疲れ。（よしのりのを下から上まで見ていき）ボコボコだったな」
よしのり「見てないだろ」
月子　「勝ったの」
よしのり「負けた」
月子　「そりゃあそうだ、今のままじゃ勝てないよ」
よしのり「で、話って」
月子　「あー、あとにしない？前は隼人と三人でよく遊んでたじゃん。その時みたいに、ふらっこ。ほら、落ち込んでるんでしょ、飯食わせてやるからついてこい」

×　×　×　×

Ｓ３０　カフェ・レジ
月子が「カフェ店員」から飲み物を受け取る

×　×　×　×

Ｓ３１　服屋・店内
月子がよしのりにコップを渡し店を進む。その後ろをよしのりがついて行く。
途中、月子が１枚の服を気に入り「アパレル店員」に声をかけ試着をする。その姿によしのりが釘付けになる。

月子がその服を買い、よしのりと店を出る

×　×　×　×

Ｓ３２　ゲームセンター・店内

月子が「あまり可愛くないペンギン」のぬいぐるみが並べられたＵＦＯキャッチャーを見つけ指差す。

月子、小銭を入れてプレイするがあまり可愛くないペンギンが重い為、「アーム」がすり抜けていく。

もう一度小銭を入れてプレイするが取れない。

ムキになった月子が何度もやるがなかなか取れない。

最後の百円を出して入れる。

と、なんとかあまり可愛くないペンギンが諦めてくれて手に取る

×　×　×　×

Ｓ３３　駅・ホーム（夜）

ベンチによしのりと月子が座る

月子　「・・・ごめん、お金なくなってご飯食べれない」

よしのり「いいよ、別に」

月子　「・・・これいる？」

よしのり、無言の拒否。月子、無念の引き取り

月子　「相談なんだけどさ」

よしのり「うん」

月子　「あたし留学しようと思ってるんだよね、演劇の勉強したくて」

よしのり「（予想とは違う話で月子に顔を向ける）いつ」

月子　「卒業したら。お母さんとお父さんには反対されるのが怖くてまだ言ってない。なんて言ったらいいかな」

よしのり「なんで俺に聞くの」

月子　「よしのりって意外と人のこと見てるからどうしたらいいかわかるかなって」

よしのり「そんなの」

月子　「それとあたし飛行機怖い、アドバイスをいただきたい」

よしのり「勝手に飛んでくれるから目瞑っとけ」

月子　「真面目な相談だよ」

よしのり「・・・俺の父さんには絶対言えないけど」

月子　「・・・」

よしのり「舞台の上が一番自分らしくいれます、ずっとあの場所に入れるようがんばり

たいんです。本気だします、手紙も出します。だからお願いします、私にはこれしかないんです」

月子　「・・・あんたはあたしか」

よしのり「演技してる月子のことを思い出してみて、そう思っただけだよ」

月子　「そうか、うん、ありがとう」

よしのり「（立ち上がる）それじゃあ、そろそろ行くよ」

月子　「（座ったまま）よしのりもきっと大丈夫」

よしのり「（彼女に顔を向ける）」

月子　「やっぱり変わってなかったから。前みたいなあんただった」

よしのり「・・・」

月子　「きっと今は濁った水に潜ってるだけ。濁ってるから進んでいい先が見えないんだよ」

よしのり「・・・」

月子　「もし前も後ろも見えないなら（上を指差して）また飛べばいいじゃん。水面から上がれば一発で解決。それまでは岩にあたって痛いかもしれないけど」

よしのり「簡単に言うなよ」

月子　「止まってたら無理だけど、跳ねていればそのうち飛び方も思い出すよ」

よしのり「さすが演劇部、詩人だ」

月子　「（目を細めて）本気で言ってる」

と、電車が到着し、扉が開く

月子　「（ペンギンを無理やり押し付けて）今日はそいつに慰めてもらいな」

よしのり「（いらないと人形を差し出す）」

月子　「返品不可。あたし、こっち」

月子が電車に乗り、よしのりと反対の線路を走っていく

×　×　×　×

S34　鷹宮家・居間

琴乃が顔を出す

琴乃　「あ。（奥に）父さん！」

奥から刀馬。その後ろにちゃっかり信長

刀馬　「座れ、夕飯ならもうないぞ」

よしのり、座ってその横にあまり可愛くないペンギンを置く

刀馬　「（あまり可愛くないペンギン人形）それはなんだ」
よしのり「気にしないでください」
刀馬　「試合はどうだった」
よしのり「・・・３－０でした」
刀馬　「３は当然お前なんだろうな」
よしのり「当然０です」
刀馬　「（ギョロッとよしのりを見る）」
よしのり「隼人と久しぶりに戦ったよ、強かった」
刀馬　「足を止めてるお前が敵う相手じゃない。負けた報告を偉そうにする為にに帰ってきたのか」
よしのり「今度は勝つ」
刀馬　「・・・」
よしのり「だからもう一度卓球を教えてください」
刀馬　「断る」
よしのり「・・・」
刀馬　「あの学校に入って馴れ合うと決めたのはお前だろ。それとも気が変わったから仲良しごっこはやめて次は友達を道連れにするのか」
よしのり「そんな言い方やめろよ」
刀馬　「隼人に勝ってお前はどうする、それでしまいか」
よしのり「・・・」
刀馬　「俺は親だ、だから子供の願いは全て聞いてやる。だが、お前の覚悟はまだ信用できない」
よしのり「・・・悔しかったんだよ、負けて。勝ちたい理由はそれだけだ」
刀馬　「・・・」
よしのり「確かに全部父さんの言うとおりだよ。俺は勝手だ、だけど勝ちたいのは自分の為だけじゃない。どんな練習でも構わない、足がもげても手が動かなくてもきっと耐えてみせる。ここで逃げるのは男じゃない（信長に）ね！」
琴乃　「誰に・・・？」
刀馬　「また負けたらどうする」
よしのり「負けない」
刀馬　「・・・門限を過ぎてまでお前なりに考えてきたんだろう。だが俺は教えん、俺は何度も誘ったはずだ、勝つための卓球にな。お前はお友達と手を繋ぐ為にこの手を弾いたんだ。お前の都合でまた友人の手を離すのは許さん」

よしのり「それじゃあ―」
刀馬　「今日はゆっくりやすめ」

刀馬、去る。よしのりと琴乃が目を合わす

琴乃　「嬉しそうだったね」
よしのり「なにが？」
琴乃　「いつも「はいはい」言ってるあんたに逆らわれて」
よしのり「・・・」
琴乃　「私も安心した。その方があんたらしいよ。（小声）ごはん隠してあるから食べて」

琴乃、去る

信長　「どんな風の吹き回しじゃ、今度は臆病風じゃないのか」
よしのり「うるさい」
信長　「初めからそうしておけばよいものを」
よしのり「こっちにはこっちの事情があるんだよ」
信長　「言い訳をするな、少しは堂々と」
よしのり「ルール４、人の生き方に文句は言うな、信長だがなんだか知らないけどこれは俺の戦だ、外野のちょんまげは黙ってろ！」

と、信長が刀を一気に抜き振りかぶる。切っ先がよしのりの首元で止まる

信長　「・・・（思い切り笑い）よくぞ言うた！（刀を降ろし）やっと本性をだしたわい、生きとったらぶった斬っておった！」
よしのり「すいまー」
信長　「よしのり！俺らが負けっぱなしの負け犬仲間というのならどうじゃ、このままいっそもう一度吠えてみるのは」
よしのり「・・・」
信長　「この信長は決めたぞ！もう一度天下を目指す！ただし、今度はインターハイという名の天じゃ！このまま怖じ気付き地を這って暮らすのか？それとも天に手を伸ばすか。今ここで選べ！」
よしのり「・・・（覚悟を決め、頷く）」
信長　「ならばここからは殿と家来の関係はなしじゃ」
よしのり「え、俺家来だったの？」
信長　「新しいのが必要じゃ」

よしのり「新しいの？」

信長　「同じ戦を戦い抜くのだから・・・ルール５じゃ！俺たちは一蓮托生、天の酒で器を満たす昵懇（じっこん）の仲じゃ！」

よしのり「ルール６、難しいの禁止。簡単な言葉で」

信長　「相棒だ」

よしのり、握手をしようと手を差し出す。が、触れられないと気づく。

信長、関係ないと刀を向ける。

よしのり、わかったとカバンからラケットを取り出す。

ラケットが刀と重ねる

暗転

Ｓ３５　西高体育館―体育館前（朝）
女が立っている。黒いジャージで身を包み、顔には鬼の仮面
そこに西高卓球部員達が現れて女に一斉に襲い掛かる。
ここからスローモーション。
女は一人だが人間とは思えない破壊的な強さで部員達を殴り、蹴り、引摺り回し、頭突き倒したりしてコテンパンにしていく。
その途中、よしのりと信長

信長　「夢」
よしのり「うん、恐ろしかった。みんなが一斉にぼっこぼっこの―」
女がロケットほど高くジャンプして伊勢川にチョップする
よしのり「ばっきばきの―」
女がゴリラくらいの力で細越にラリアットを浴びせる
よしのり「ばっちんばっちんの―」
女が破壊的なビンタを雄と英に食らわす
よしのり「ぶんぶんに」
池松が隙を狙って逃げようとする。
が、女の腕がルフィと同じくらい伸びて池松をひっとらえ振り回したのち
部員達の屍の上に捨てる
よしのり「こてんぱんにされてた」
信長　「それで」
部員たちが大急ぎで立ち上がり一斉に女に服従のポーズ
よしのり「皆を支配してた」
信長　「何者じゃ」
よしのり「さぁ、見たこともない人・・・」
信長　「どうした」

よしのり「いや、あれは、鬼だった」

女が振り向くと鬼の顔をしている。顔を見せた瞬間、雷が鳴り光る。
そして、一同が消える

信長　「（寄り添ったフリ）昨日の惨敗がよほど答えたのだろう。（手のひらを返して）が、自業自得じゃ」
よしのり「だから、早く練習しないと。でも」
信長　「他の者が立ち上がるか、だろ」
よしのり「・・・」
信長　「あの者たちはおぬしと同じ、いや、それ以上に傷が深いかもしれんのぅ」
よしのり「・・・」
信長　「一度、刀を折れば元には戻らん。打ち直し磨かん限りはな」
よしのり「とにかく、みんなに会って話してみるよ」
信長　「（おもしろがるように）骨も折れるのぅ」

よしのりが息を深く吸い込み吐き出す。そして、体育館に一歩踏み出す。
と、部員たちが全員とっくに準備をしている

英　「ねぇ！なにやってんの？朝は練習時間短いんだから早く来なよ！」
雄　「そうだよ！あなたが遅れた一分があれば何球、球を打てると思ってんの？」
細越　「大体あなた後輩でしょ？普通目上の人間より先に来て準備しとくものじゃない？考えられない！」
池松　「掃除もしないで卓球が始められると思ってるわけ？床もきれい、台もきれい心も磨いてやっと卓球が始まるんだから！」
伊勢川　「おまえらいつから姑卓球部はじめたんだ、鷹宮、おはよう」
よしのり「信長さん、ここはまだ夢の中でしょうか」
雄　「こっちみなさい！誰と話してるの？負けたショックで気でも狂ったのかしら」
よしのり「ショックなのはみんなだって」
伊勢川　「（恐る恐る）鷹宮、実はあの後、皆でファミレスで話しあって、決めた。今度は勝つって」
よしのり「・・・」
伊勢川　「生きてきてあんなに悔しかったのは初めてだ。相手が本気でやってるのに俺達は情けないプレイをしたと思う。だから、一度でもいい、勝って見せつけてやりたいんだ。弱いままでいるのはもうやめだ。だけど、全員の気持ちが一緒じゃないと意味がない。鷹宮、もちろん中学の時の事はわかってる。だけどそれでも―」

よしのり「俺は、もう一度飛びます」
伊勢川　「・・・（嬉しく背中を叩き）そうこなくっちゃ」

顔を見合わせた後、三年の細越、池松、雄も頭を下げる

英　「よしのり（グーサインをむけ）やろう」

よしのり、それに応えて頷く

伊勢川「鷹宮、やっぱりお父さんにコーチを頼めないかな」
よしのり「（首を横に振って）言ってはみましたが撃沈しました」

と、田中が天井に突き刺さるんじゃないかくらいスキップして来る

池松「見ろ、絶対に余計なことが起きる」
細越「この部の疫病神かもしれん」
田中「おまんら朝からやる気満々だな、そんなおまんらにハッピーニュースだ。紹介したい人がいる」
雄「今度はどこの部長ですか」
田中「違う違う。でも、驚くぞ、鷹宮ぁ、お前がお父さんにお願いしたんだって？」
よしのり「え？でも―」
田中「お父さんがコーチを紹介してくれたんだ。急遽、本日からついてくれることになった。それじゃあどうぞ（拍手）」

と、黒いジャージの女が入って来る。ここから「鬼」と呼ぶ

田中「紹介します、西高卓球部のコーチになる―」
鬼　「（手で結構ととめて）お前らにくれてやる名前はない！」

信長とよしのりが思わず目を合わせる

よしのり「お、鬼だ」
鬼　「東高との練習試合の録画を見てやったがあまりにも腹が立ちすぎて酒瓶を投げたらテレビが壊れた、どうしてくれる」

一同、怖すぎて何も言葉が出ない

鬼　「これから甘えで染まり切ったお前らの足の裏から毛根の先っちょまで徹底的に叩きなおす。ここを部活だと思うな、軍隊だと思え。質問はあるか」
雄　「（手を上げる）」
鬼　「もしくだらない質問だったらケツの穴にピンポン玉ぶち込んで試合に出すぞ」
伊勢川　「（雄の手を降ろし）こちらで精査します」
よしのり　「（手を上げる）」
英　「（小声で）やめとけ」
鬼　「なんだ」
よしのり　「僕らは勝てますか」
鬼　「・・・知るか。勝つ為に必要な事は全て教えてやるがそこからはお前ら次第だ、他人に結果をゆだねるな、雑魚の特徴だな」
伊勢川　「コーチ、まずはなにを」
鬼　「その前に、お前らに言っておく。顧問にふざけた口を利くのはもうやめろ。味方してくれる大人がいなくなるぞ。わかったな」

呆気にとられながらも全員、頷く

鬼　「田中先生、あなたも堂々としていてください。東高と戦わせたのも彼らが何かを見つける事に賭けたからでしょ」
田中　「いやいや、自宅から近かっただけです。ほら、どうぞ、始めてやってください。インターハイは待ってくれません」
伊勢川　「インターハイ？僕たちが？二回戦だって行ってないのに」
田中　「やるならとことんやろう、確かに、信じていれば夢は叶うだなんて口が裂けても言えない、だけど信じてなければ成しえないことがきっと何処かで僕らの訪れを待っているってミスチルの桜井さんも言ってたし（鬼に）でしょ」
鬼　「（メンバーに向きなおり）お前ら明日からしばらくラケットは持ってこなくていい」
英　「卓球部なのにですか？」
鬼　「今のお前らじゃラケットは仰いで涼むくらいしか役に立たない。勝ちたいなら口答えをするな。それぞれ個別のメニューをこなしてもらう。いいか、引き返すなら今だぞ。私を家に帰せばこれまで通りのうのうと卓球ごっこができる。だが、もしやるってんなら、半端はなしだ、勝ちたい奴だけついてこい。その代わり、なにがあっても私はあなた達を見捨てない。全力で行く、本気でかかって来い」

その言葉を聞いて一同がラケットを置きに奥へ。そして、戻ってくる。

最後に戻ってきたよしのりの背中に鬼が声をかける

鬼　「鷹宮。お前の父親も本気だ。周りと、自分の覚悟を裏切るなよ」

よしのり　「（振り返り）はい」

鬼　「（始めるとしきりなおして）いいか！これからお前らはケツの穴を見合うチームになる、恥も失敗も押し付け合い受け止めろ。試合は孤独だが後ろにクソ用のバケツを持った仲間がついてる。一番の罪は負ける事じゃない、後悔する事だ」

雄　「（手を挙げて）一番じゃなければ負けても許されますか」

鬼　「いや、（雄の股間に指を差しながら口を鳴らし）二度と使い物にできなくしてやる。わかったら、ウォームアップ！」

一同が一斉にウォームアップを始める。
味わったことのないトレーニングのきつさに悲鳴が上がる

鬼　「伊勢川！部長だか何だか知らんがそんな肩書は台の前ではテスト前日の一夜漬けくらい役に立たない。背負ってるものを置け。お前は前後のステップを永遠に踏んでろ、今はそれでいい」

伊勢川、敬礼

鬼　「細越！お前の一番の武器はその身長でも減らず口でもない、怒りだ。もしも試合中イラついたらチャンスだと思え、お前は火山だ、遠慮なく噴火しろ。ただし、マグマが溶かすのは相手じゃない、（腕を上げて）手首だ」

細越、自分の手首に目をやり敬礼

鬼　「仲世古兄、弟！お前らは息が合わないんじゃない、あいすぎてるんだ。好きな食べ物は」

雄・英　「シュークリーム」

鬼　「好きな女優は」

雄・英　「ＡＶ女優」

鬼　「好きな映画は」

雄・英　「マイティ・ソー」

鬼　「お前らは思考と行動が同じで互いの意思もわかってるはずだ。なのになぜ、譲らない。自分だけでいい格好ができると思うな、二人で初めて英雄になれる。（ロープを投げ）学校では授業以外はこれで腕を結んで過ごせ」

雄と英、敬礼

鬼　「池松！お前はカットマンなのにどうして体力がない」
池松　「すいません」
鬼　「これから毎日私の犬の散歩をしろ。犬の名前はジェットだ。ついてこれなければお前を振り回し引きずるぞ。とにかく走って走って走りまくれ廊下は歩くな、走れ！」

池松、敬礼

鬼　「鷹宮。お前は弱い、わかってるな」
よしのり　「はい」
鬼　「勝ちたいなら、胸の中の猛獣を引きずり戻せ」
よしのり　「・・・」
鬼　「お前らはここからだ。始めるぞ」

×　×　×　×

S36　公園（夕）

隼人のもとに月子。

以下の会話は二人にしか聞こえない

隼人　「わかってる」
月子　「え」
隼人　「お互いの道がある」
月子　「・・・」
隼人　「だけど」
月子　「当たり前」
隼人　「・・・」
月子　「私たちはずっといたもん。これからも一緒」

隼人が頷き、月子が去る。

そして、隼人が反対の方へ去っていく

×　×　×　×

S37　西高・職員室―工場

汚れた作業着の刀馬と鬼の電話での会話

刀馬　「（帽子を取り）泣きべそでもかいてるか」
鬼　「私も期待しましたが、腹を決めてましたよ」
刀馬　「そうか、あとは頼む」
鬼　「随分とあなたにも鍛えられましたからね。やれることはやります」
刀馬　「お前のやり方でいい、逃げ出すならそれまでだ」
鬼　「そんな体力残しませんよ（電話を切り）」

刀馬、安心したかのように去っていく

×　×　×　×

Ｓ３８　西高・体育館

西高メンバーが必死にメニューをこなし、くらいついて行く

×　×　×　×

Ｓ３９　駅・ホーム

帰宅ラッシュの乗客でごった返してる。

隼人がやって来て列に並ぶ。

しばらくしてその後ろからよしのりと信長

よしのり「よぅ」
隼人　「お前にかまってる暇はない」
よしのり「（出せる限りの誠意をもって）隼人、ごめん」
隼人　「・・・」
よしのり「今度は俺もガツンとやってやる」
隼人　「・・・（振り返る）残念だったな、もう遅い」
よしのり「俺たちは必ず東高の背中に追いつく。魔王の軍団がなんだ、それなら西高は鬼の軍隊だ！」
信長　「光秀！」

と、光秀がヌッと現れる

信長　「俺らはもう一度天下を目指す、勝負じゃ」
よしのり「逃げるなよ」

隼人、どの口が言うんだと笑みを浮かべるが同時に挑戦を受け入れる。

と、電車の到着を知らせるベルが大きく鳴る

隼人　「（鼻で笑いながらも嬉しそうに）おかえりよしのり」

よしのり「ただいま」

やがて電車がホームに到着する。
よしのりと隼人が同時に足を踏み出し飛び乗る
×　×　×　×
Ｓ４０　イメージ
信長と光秀が同時に刀を抜く。
と、よしのりの後ろから西高メンバーと田中、鬼。
隼人の後ろには東高メンバーと畔木、由衣が集まる。
両チーム共まるで刀を抜くかのようにラケットを構え向かい合う

信長　「敵は、インターハイにあり！」

両チーム、相手を威嚇するように足を地面に降ろし音を鳴らす。
そして、よしのりは信長、隼人は光秀の刀を受け取る。
やがて、二つの刃が交わる。決戦は近い

全暗転

第二幕　「出陣」

Ｓ４１　安土城・天守閣。天正９年（１５８１）

光秀、蘭丸が座りその前で信長が敦盛を口にしながら舞う。

その途中、光秀に刀を向け何かを誘うが光秀が首を横に振る。

信長、一度は離れるが舞の途中、いきなり光秀の首に刀を向け立たせる。

信長、さらに刀を振り、仕方なく光秀が刀を手に取りかろうじて応戦する。

蘭丸、思わず膝を立てて刀を手に取る

信長　「（光秀に）まんざらでもないか。（刀を収め）蘭丸、お前らでわしの首を斬れ」

蘭丸　「（到底理解できず）は」

信長　「十手やる」

光秀　「その様な遊びあまり好きではありません」

蘭丸　「わたくしも殿の首を狙うなど」

信長　「なんじゃ、今までどんな願いでも叶えてこれたろう。（二人に）なぁに、将棋と思えばいい、何が楽しいかは知らんがジジィ共としょっちゅう茶を飲みながら指してるではないか、それと一緒じゃ。ここに王を守る兵はおらんぞ。首を取るなら今だ。よぅ考えて指せよ、謙ったその腹の中のもんをちょいとみせてみぃ」

光秀　「・・・（刀を抜く）」

蘭丸　「（思わず光秀に目を向ける）」

光秀　「なに、いつものお戯れじゃ」

蘭丸　「・・・（無理矢理納得して刀を抜く）」

信長　「十手をすぎれば転がるのはお前らの首じゃ！」

光秀が息を整え斬りかかり、蘭丸も後に続く。

信長、一手避けていくたびに右手で光秀、左手で蘭丸の攻撃を指を立てながら数えていく。

初めは悠々と攻撃を避ける信長だが、やがて連携した光秀と蘭丸の連撃に追い込まれる。

そして、ついに倒れた信長の前に光秀が立ち、十手目でトドメを刺そうとしたその瞬間、蘭丸の十手目が光秀に向かう。それを寸前でかわす光秀

信長　「蘭丸！」

蘭丸　「私のこの太刀は私の命、私の命は，織田信長，をお守り通す為のみにあるのです・・・これが私の十手目です」

信長　「（刀を拾い蘭丸に向ける）飯じゃ、腹が減ったわ」

蘭丸「（刀をすぐに納め急いで受け取り）すぐに用意させます」

信長「光秀、お前の腹の中を少し知れて良かったぞ。最後の一手は取っておけ！いつでも受けて立つから正々堂々来い、将棋のような戦は嫌いじゃ」

信長が威勢よく去っていく。

蘭丸が光秀に言葉をだそうとするが

光秀「腹が減ったな」

蘭丸、口を閉じ去っていく

×　×　×　×

Ｓ４２　教科書内での文章

光秀が浮かびあがる

光秀「時は今、雨が下知る、５月哉」

×　×　×　×

Ｓ４３　西高・教室―同・廊下（昼）

それぞれ時間軸は別だが同時に進行される。

田中が教科書を持ち授業を始める

田中「えー、これは光秀が織田信長に対しての謀反の心境を詠んだ歌だ。時は光秀の出身を表し。雨は天、つまり天下、下知るは命令。要約すると天下に向かって命令を下す、「俺が天下人になってやるぜ」と解釈されてる」

よしのりが携帯を持って立ち、信長が覗いている

よしのり「いっぱい載ってるよ、あなたが裏切られた理由」

田中「諸説あるうちのひとつが、野望説だ。光秀は身分の低い武士の生まれだった為、裕福な暮らしはできなかった。だから、いつか成り上って腹を満たしたいと願うのは不思議な話じゃない。何度も主君を失い放浪する中、最終的にいきついたのが織田信長だ。彼は確かに信長に感謝していた」

光秀「瓦礫のように落ちぶれ果てていた自分を召し出しそのうえ莫大な人数を預けられた、一族家臣は子孫に至るまで信長様への御奉公を忘れてはならない」

信長「やかましい、どの口が言っている」

田中「しかし、彼の家法にはそう書いてある」

よしのり「嘘だったってこと？」

信長　「（笑う）奴は俺の前ではまっすぐじゃ、嘘などつかん」
よしのり「だったらどうして」
信長　「簡単な話じゃ、この俺でも満たされなくなったのよ、その腹が」

×　×　×　×

Ｓ４４　東高・部室
光秀と隼人

隼人　「悪かったよ」
光秀　「（顔を彼に向ける）」
隼人　「俺が余計なことしなければあなたも決着をつけられた」
光秀　「気にするな、あの方との勝負は一度ついている」
隼人　「勝ち逃げできるか？」
光秀　「それはお互い同様だ。眠った獅子を刀とラケットで叩き起こした。そうだろ」
隼人　「（図星だと頷く）」
光秀　「が、今やこの刀を抜けるかどうかは、運命次第か」
隼人　「魔王次第だ」

×　×　×　×

Ｓ４５　西高・廊下
授業が終わるチャイムが鳴り田中が去る。
と、よしのりの元に弁当を持った琴乃

琴乃　「よしのり、忘れてる（渡して）」
よしのり「（手に取り）ありがとう（が、琴乃が力を入れてる為、受け取れない）ん」
琴乃　「あのさ、一つお願いがあるんだけど」

よしのり、なんだと顔を向ける。
琴乃、なんだか気まずそうによしのり耳打ちをする。
よしのりが驚いて思わず離れる

琴乃　「本気」
よしのり「コーチと先生に聞いてみる」
琴乃　「ありがとう、明日のおかず増やしとく」
琴乃が去っていく
信長　「お前に頼みなど珍しい」
よしのり「（耳打ち）」
信長　「え！」

よしのりが去り、信長が追う

×　×　×　×

Ｓ４６　東高・部室

隼人が出ていこうとすると由衣が入って来る

由衣　「あ」

隼人　「先輩でしょ、よしのりに言ったの」

由衣　「（とぼけた顔）」

隼人　「おかげで宣戦布告されました」

由衣　「そっか」

隼人　「・・・やっとです」

由衣　「でも、このままじゃ」

と、伊達、朝倉、亀井、蜂須賀が入ってくる

伊達　「向井！（隼人を抱きしめ）お前ってやつは」

隼人　「チームに迷惑をかけてしまって本当に申し訳ありません」

朝倉　「レギュラーから外されるのか」

隼人　「退部にならなかっただけマシです。僕のことは気にしないでください」

亀井　「それじゃあ、魔王に突撃した勇者を止めてこい」

隼人　「・・・（いないことに気づき）部長が？」

蜂須賀　「食われなきゃいいけどな」

×　×　×　×

Ｓ４７　同・職員室

畔木の元に最上

最上　「向井には僕達からも十分反省させますし、これ以上馬鹿なことはしないはずです」

畔木　「問題を起こした人間がペナルティなしに現状を維持できるとでも？」

最上　「部室の掃除でも坂ダッシュでもなんでもさせましょう、試合にはあいつが必要です。コーチだってそれは」

畔木　「あいつもそれをわかっていたはずだ、その上で自らチームが勝てる可能性を減らした」

最上　「・・・」

畔木　「お前がする事は俺の説得じゃない、チームがぐらつかないようコントロールしろ」

畔木が去る

×　×　×　×

Ｓ４８　同・部室

隼人たちのもとに最上。全員が最上の開く口を待つ

最上　「すまない、向井。俺じゃ駄目だった」

伊達が最上を抱きしめようとする。が、馴れた手で拒否する

隼人　「（首を横に振り）僕がいなくなったってどうかなるチームじゃないでしょ、ですから、とにかく練習を。春の大会が待ってます」

最上　「・・・」

隼人　「（半分冗談）それにあまり無茶してコーチの機嫌を損ねたら先輩もどんな罰を食らうか―」

最上　「悪いな向井。俺だって愛想を振りまけない時もあるんだ」

最上が隼人の肩を強く握り去ってく

蜂須賀　「いいのか、あんな大見得切って、相手は魔王だぞ」

亀井　「ああなったらとまらん」

朝倉　「向井（隼人の前でカードを出す）」

伊達　「今はやめとけ」

朝倉、カードを収め、去って行く一同

×　×　×　×

Ｓ４９　西高・体育館

一ヶ月後。

西高メンバーがランニングしてる。

雄と英の足は縄で結ばれてる

細越　「伊勢川、準備はいいか」

伊勢川　「ん」

細越　「この後、大会の抽選会だろ」

伊勢川　「言うなよ、震えてるんだから」

池松　「頼むぞ、チームの命運がかかってる」

伊勢川　「・・・なぁ、池松。最近、バテないな」

池松　「毎日あのロケット犬の相手をしてたらバテてる暇なんてないんだよ」

細越　「（雄と英を見て）そういや、お前らも喧嘩してないよな」
雄　「つらすぎて喧嘩してる力なんてない」
英　「むしろ慰め合って愛が―」
雄・英　「（歌うようにハモって）膨らんでいます」
細越　「なぁ、伊勢川。大会は来月だ、そろそろ卓球やらなくていいのか？お前から言ってくれよ」
伊勢川　「それはつまり俺の口からあの鬼様にお願いごとをしてくれってことか」
池松　「下手したら皮剥がされて鬼のパンツにされるな」

次第に一同がゴールする。
と、タイムウォッチを持った鬼が現れる

鬼　「（タイムを目にし）お前らにしては悪くない」
伊勢川　「あの、コーチ、一つよろしいでしょうか」
鬼　「ん」
伊勢川　「あ、いや、その（細越たちに救助を願う視線を向けるが返ってこない）」
鬼　「なんだ」
伊勢川　「・・・コーチが来てもう一ヶ月が立ちます。そろそろ、卓球をやらせていただくのは、どうかなって・・・」

鬼が全員を見渡す。怯える一同

鬼　「そうだな、ラケットをもってこい」
伊勢川　「いいんですか」
鬼　「少しでもサボれば叩き割るからな」

一同、嬉しさを隠せない

鬼　「その前に水だ、休め」

と、ジャージを着た琴乃がドリンクを運んでくる

琴乃　「お待たせ（ドリンクを配っていく）」
伊勢川　「（配られて）ありがとう」
琴乃　「ううん」
雄　「まさかうちにもマネージャーがつくとはなぁ」

鬼　「調子に乗るなよ、私はお前らが甘えるから反対したんだ」
琴乃　「大丈夫です、甘えだしたら泥を吸わせますから」

よしのりが琴乃に近づいて

よしのり「大変？」
琴乃　「楽しいよ、一生懸命な人たちの横にいるとね。それに今好きな事しないと三年は受験がやってくるでしょ」
よしのり「うん」
琴乃　「あんたこそ、大変よ。部員増やさないと部活自体無くなっちゃう」

と、田中

田中　「伊勢川、そろそろ抽選会の時間だ」
伊勢川「はい」
琴乃　「なんだかドキドキするね」
細越　「くれぐれも、いきなり東高とぶち当たるブロックなんて引くなよ」
伊勢川「任せろ、くじ運はいい方なんだ」
鬼　「残った連中は球打ちだ、久しぶりでなまってるだろうからゆるく行こう、一人2千本づつでいい」

一同、言葉が出ない。
逃げるよう伊勢川、琴乃、田中が向かう
×　×　×　×
S50　抽選会場・ステージ。
中央に箱が設置されている。
箱の前に最上と　由衣が立つ。
最上が箱の中に手を入れて上げると「赤色」のボールを掴んでいる。
そのまま去っていく二人。
次に緊張でガチガチの伊勢川と琴乃が登壇して、箱の前に立つ。
伊勢川、箱に手を伸ばす

伊勢川「（よくかき混ぜながら）赤はダメ、赤はダメ、赤は絶対に・・・」

伊勢川、手を上げ、恐る恐るボールを見ると真っ赤。顔は真っ青。
伊勢川、ゆっくりと箱にボールを戻そうとするが琴乃の手が止める

×　×　×　×

S51　同・外

伊勢川、琴乃、田中の前に最上と由衣

最上　「練習試合ではどうもありがとう、調子はどうだい」
伊勢川　「この前はとても不甲斐ない試合をしてしまったけど次はきっと驚かせるよ」
最上　「楽しみだ」
伊勢川　「東高は」
最上　「順調だよ」
由衣　「マネージャーの篠塚です」
琴乃　「鷹宮です」
由衣　「・・・たかみや？」
琴乃　「鷹宮よしのりの姉です」
由衣　「よしのりくん、どう？」
琴乃　「火が付いたみたい」
由衣　「そう、よかった」
伊勢川　「じゃあまた」

伊勢川、琴乃、田中が去ろうとする

最上　「一度戦った仲だ、話さないのはきっとフェアじゃない」
伊勢川　「・・・」
最上　「こないだの一件でうちの向井が外された。これであいつも反省するだろうから鷹宮君には許してくれと伝えてほしい、それと―」

と、琴乃が一礼して急いで去っていく

最上　「こうなったのは君のせいじゃないからと・・・」
伊勢川　「伝えておくよ、わざわざありがとう」

伊勢川が去る

田中　「お互い大変だ、うちもやっと必死になってね。向井君の方こそ大丈夫かい」
最上　「これがいつもより張り切ってて、止めるのも一苦労です」
田中　「なによりだ。お互い暴れたらいい」

田中が去り、最上、由衣も去る

×　×　×　×

S52　西高・体育館―東高・体育館

数時間後。

練習を終え、くたくたのメンバーの姿が。

そこに琴乃

細越　「おぅ、どうだった」

琴乃　「（よしのりに）隼人くんがメンバーから外されたって」

よしのり　「・・・」

雄　「何の話だ」

伊勢川と田中がやってくる

よしのり　「（伊勢川に）本当ですか」

伊勢川　「お前のせいじゃない、最上君がそう伝えといてくれって」

よしのり　「・・・」

鬼　「東高の対応は間違ってない。鷹宮、今は仲間の事だけに頭を使え、わかったな」

よしのり　「・・・」

細越　「伊勢川、抽選は」

×　×　×　×

S53　同―東高・職員室

畔木の元に最上

最上　「運がいいことにうちのブロックはほとんど強豪校とは当たりません。ですが、三回戦で―」

最上・伊勢川　「西高と当たる／（指を3にして）ごめんなさい」

細越　「貴様！」

伊勢川　「インターハイ目指すなら、遅かれ早かれどうせ当たるんだ、どうした、ビビってるのか」

細越　「（つよがり）バカ言うな、何だったら一回戦でも良かった」

鬼　「アホか、このままでは二億年かかっても勝てやしない。最悪なくじ運だが仕方がない。今日はこれでしまいだ。帰って飯食ってエロ動画でも見て寝ろ。明日からは女の裸ですら見ても元気にならないトレーニングが始まるぞ」

メンバーが怯えながら去ってく、田中も去る

伊勢川　「コーチ、一つだけお願いがあります」
鬼　「なんだ」
伊勢川　「コーチのおかげでやっとチームになってきている気がします。これまでみんなで勝とうだなんて誰も口には出さなかった。だけど今はー」
鬼　「前置きはいい、用件だけ話せ」
伊勢川　「初めて人の為に負けるのが怖くなってるんです。俺達３年は，負けても頑張ったから後悔はない，それで済む。だけど、残る人間は違います。きっと悔しくて今度こそは勝ちたくなる。だから、もし俺たちが負けてこのまま何もなくこの部が終わってしまったとしても、鷹宮と英には卓球を教えてほしいんです、お願いします」
鬼　「・・・言ったはずだ、地獄の底までだろうが付き合ってやる」
伊勢川　「・・・」
鬼　「それと、お前らが変わったならそれはお前たちで変えたんだ」
伊勢川　「ありがとうございます」
鬼　「それと、なんだか凄く強くなったていで話しているがお前らは弱い、雑魚だ、まだ一勝もしてない。それなのに負けとか口に出すな、次同じこと抜かせばお前のタマをピンポンマシーンに詰めて打たせるぞ」
伊勢川　「（恐ろしすぎて）はい」

去っていく鬼。
片づけをしている琴乃が伊勢川に声をかける

琴乃　「大丈夫？」
伊勢川　「本気になるって大変だよ、考えることが山ほどある」
琴乃　「話くらいならいくらでも聞くよ」
伊勢川　「（ほんの一瞬の間があき）じゃあ、マックでも行く？」
琴乃　「（ほんの一瞬の間があき）うん、いく」

二人が去っていく
×　×　×　×
Ｓ５４　駅・前―東高・部室（夕）
よしのりと信長。よしのりが電話を掛けている。
それが隼人に繋がる

隼人　「よぅ」

よしのり「ようじゃない、どうしてすぐ言わなかった」
隼人　「ごめんな、せっかくやる気が出たってのに」
よしのり「お前な」
隼人　「俺なら大丈夫だ、別に一生試合に出れないわけじゃない」
よしのり「どうにかならないのか、コーチに頼むとか」
隼人　「無茶言うな、魔王だぞ」
よしのり「でもー」
隼人　「人の心配してどうすんだ、俺達は三回戦であたるんだぞ、まぁ、そこまで辿り着けばだけどな」
よしのり「隼人」
隼人　「なんだよ」
よしのり「お前がいなきゃやる気が出ない」
隼人　「（一瞬の間が空き）切るぞ」

隼人が電話を切る。
よしのりが携帯をしまいどうしたものかとひとまず進む。
と、目の前に作業着にリュックを背負う刀馬

刀馬　「よしのり」
よしのり「（気まずいが声を返す）」
刀馬　「帰りか」
よしのり「うん」
刀馬　「俺もだ、琴乃はどうした」
よしのり「遅くなるって」
刀馬　「そうか、一緒に飯でも食うか」
よしのり「え」
刀馬　「駄目か」
よしのり「いや、別に」
刀馬　「何が食べたい」
よしのり「（突然の誘いで頭が回らない）あー」
信長　「（店のバナーを見て）おい、よしのり！あの勇ましい名前の食べ物はなんだ」
よしのり「サムライバーガー」
刀馬　「マックがいいのか」
信長　「（頭をぶんぶん縦にふる）」
よしのり「（マクドナルドの入り口を見て）あ、姉貴。マック入ってた」
刀馬　「誰だ、あの男は」

よしのり「多分部長だよ」
刀馬　「うちの娘とマックで何をするつもりだ」
よしのり「マック食うんだよ」
刀馬　「信用できる男か」
よしのり「いい部長だよ」
刀馬　「隣の席で食べるぞ」
よしのり「嫌われちゃうよ」
刀馬　「いいか、よしのり。日本には娘に手を出す男はしばいていい法律があるんだ」
よしのり「ないよ。今日は違うとこにしよう」
刀馬／信長「え」
よしのり「そうだ、行きたいところがあるんだ、ひとりじゃ行きづらいとこ」

×　×　×　×

S55　裏山・祠前（夜）
よしのり、信長、刀馬が祠の前に近づく。
信長が足を止めてよしのりに顔を向ける

刀馬　「懐かしいな、子供の頃お前をよくこの祠まで連れてきた。どうしてここに」
よしのり「わかんない、だけど、来たかったんだよ。今ではもっと特別な場所だから」
刀馬　「祠の名前を知ってるか」
よしのり「そんなのあったの？」
刀馬　「昔、名もない男が追っ手から身を隠すためにこの地にやってきた。その男が助けてくれた主君といつかまた会えることを願ってこの祠を建てたらしい。例え巡り会えた場所がどんな地獄であったとしてもな。それからこの場所は地獄祠と名付けられた」
よしのり「そのままんまだな」
信長　「（その話に、ハッとしていて）そう言うな」
刀馬　「地獄のようにどんな苦しい状況であってもあがいていれば必ず何かを見つける。そんな子供になるようお前を連れてきていた」
よしのり「だけど、俺は一度逃げた」
刀馬　「説教じゃない、今となっては親の勝手だ」
よしのり「・・・」
刀馬　「どうだ、戻ってきた感想は」
よしのり「正直まだわからないよ、勝つまでは」
刀馬　「（彼の意思を最大限尊重した上で）昔話は最初で最後だ。俺が現役の頃、足の怪我をした。試合直前の俺に医者から与えられた選択肢は２つだ。これからも卓球を続ける為に一度ラケットをしまうか、次の試合で最後にするか」

よしのり「・・・」

刀馬　「俺は引かずにラケットを握った。正直後悔をする時が今でもある。勝ちたい
あまりに自分を傷つけた。だが、その勝ちがどうしても必要だったと思う俺もい
る。正解はないだろうがよしのり、お前にはお前が一番納得する勝ち方を
してほしい」

よしのり「(その言葉を飲み込み大きく頷く)」

刀馬　「だが、今のお前を見ていればなんだか、この後悔も薄れていく様な気がするよ」

よしのり「・・・」

刀馬　「腹が減ったな、やっぱりうちに帰るか、たまには俺が飯でも作ろう」

よしのり「姉貴が腰抜かすよ」

刀馬　「だろうな」

よしのり「父さん、ありがとう」

刀馬　「(よしのりの首にかかるヘッドフォンを指差して) まだつけてるんだな、俺も
試合前に世話になったオンボロだ」

よしのり「お守りみたいなもんだよ」

刀馬　「ならぬかるなよ。負けたら―」

よしのり「(わかってると目で返す)」

刀馬、それ以上は言わずに去る。
じっと祠を見つめている信長

よしのり「どうしたの」

信長　「お互い周りに生かされた身だ。この魂、無駄にはできんぞ」

その言葉によしのりが軽く頷きヘッドフォンを耳につける

暗転

Ｓ５６　西高・演劇部・部室―東高近く・路上（夕）

よしのりが携帯を開きメッセージを送る。

それを部室に入ってくる月子が確認して返す。

以下の二人の会話はメッセージのものである

よしのり「（打ちながら）部活は順調？」

月子　「（打ちながら）台詞が全く覚えられない、あんたの負のエネルギーのせいだ」

よしのり「（打ちながら）今はそんなのない、はず」

月子　「（打ちながら）かもね、がんばってるから」

よしのり「（打ちながら）もしよければ、試合来るか。三回戦で東高と当たる」

月子　「（打ちながら）一回戦も二回戦も勝てばね」

よしのり「（打ちながら）必ず勝つよ」

月子　「（打ちながら）だけど、隼人でれるの」

よしのり「（打ちながら）なんとしても出させる」

月子　「（打ちながら）そう、なら偵察しに行く」

よしのり「（打ちながら）待ってる」

月子　「（打ちながら）あ、留学の話、お父さんとお母さんに話した」

よしのり「（打ちながら）どうだった」

月子　「（打ちながら）気持ちはわかったって、でも、お前の力でどうにかしろって」

よしのり「（打ちながら）どうにかするんだろ」

月子　「（打ちながら）わかってんじゃん。あたしも戦ってみる」

よしのり「・・・（打ちながら）あのさ、試合が終わったら俺も話したい事があるんだけど聞いてもらえるかな」

月子　「・・・（打ちながら）うん、いいよ」

よしのり「（打ちながら）じゃあ、また」

月子が画面を閉じ、これはまいったと顔に出る。そして、去る

信長　「話と言いつつ抱くのか」

よしのり「抱かない」

×　×　×　×

Ｓ５７　西高・体育館

伊勢川が入ってくる。と、その後ろから細越がボールをラケットの上でバウンドさせながら入ってくる

細越　「なぁ、鷹宮知らない？（ボールをパス）」

伊勢川「（ラケットでキャッチ）あー遅刻してくる」
細越「なんで」
伊勢川「あー（ボールをパス）」

伊勢川が気まずそうに奥へ向かおうとすると池松が同じくラケットでボールをバウンドさせながら入ってくる

池松「なぁ、鷹宮知らない？（伊勢川にボールをパス）」
細越「遅刻だって」
池松「なんで」
伊勢川「口止めされてる（池松にパス）」
細越「言えよ（伊勢川にパス）」
伊勢川「駄目だ」
池松「大会まであと二週間だぞ、放っといていいのか（細越にパス）」
伊勢川「俺も止めたけど、今のあいつには必要なことだろうから（池松にパス）」
池松「だからなんだよそれ」
伊勢川「言わないって」
細越「言えよ」
伊勢川「言わない」
池松「言いなさい」
伊勢川「言いません」
池松「（姑のように）言いなさい！コンプラなんて関係ない、手出すわよ」

と、陰で話を聞いていた雄と英がボールをラケットの上でバウンドさせ、足をロープで結んだ状態で入ってくる

雄「まさか、鷹宮のやつクラスメイトと一緒に観覧車の中で誰にもばれないようにエロいことしてんじゃねぇんだろうな」
伊勢川「ＡＶ見過ぎだ」
英「（ただの興味本位）チームに隠し事だなんて許せねぇな」
雄「仕方ない、壁に貼り付けて目隠しと猿ぐつわをさせて脚長めの女教師に顔を踏んでもらおう」
英「どこにいんだよ、そんな教師」
雄「いるだろ、ここ学校だぞ」
伊勢川「お前もうＡＶ見るな」

と、鬼。その後ろに琴乃

鬼　「集合」

メンバー達が一寸のムダもない軍隊の如く動きで一瞬で整列する

鬼　「鷹宮はどうした」

沈黙。

あまりに耐えられず細越が伊勢川の背中を押し、伊勢川が一歩前へ

伊勢川　「今日は、あの、遅刻です」
鬼　「なぜだ」
伊勢川　「今は話せません自分で話したいそうで（す）」
鬼　「（言い切る前に）話せ」
伊勢川　「直接、皆には話すそうで（す）」
鬼　「（言い切る前に）今日は筋トレなくしてやろうか」
伊勢川　「東高にいます！」

×　×　×　×

S58　同ー東高・廊下

よしのりと信長

琴乃　「なんで！」
伊勢川　「・・・（全員の視線に耐えられず悟ってくれと息を漏らす）」
鬼　「あのボケ！お前ら！ランニング２００周！」

西高メンバーがお葬式のような顔で走り去っていく。

東高の廊下を歩くよしのりの前に畔木。彼の後ろに由衣

畔木　「君は」
信長　「織田信長じゃ」
よしのり　「西高卓球部の鷹宮です」
畔木　「こないだの練習試合では迷惑をかけてしまったね」
よしのり　「そのことでお話が」

由衣、そっと気配を消して後ろに去っていく

畔木　「こちらとしては今度の大会で向井の出場を見送ることで責任をとる」
よしのり「僕にも原因があります。だから、隼人をレギュラーから―」
畔木　「どんな理由があろうとも、台の上では勝敗以外の事があってはいけない」
よしのり「・・・」
畔木　「わざわざ、すまなかったね。せっかくだ、練習でも見ていくかい」
よしのり「もし責任をとらせるというならもう一度僕と戦わせてください」
信長　「戦じゃ」
よしのり「彼の納得するプレイをします」
畔木　「それでなにになる。あいつは台の前に立つ資格はない」
よしのり「これで僕たちが勝っても僕は嬉しくない」
畔木　「・・・君は変わったのか。そう誰かに意見するタイプには見えなかったが」
よしのり「元々です」

と、隼人が走ってくる。後ろから光秀

隼人　「(信長を見ながらも) よしのり、なにしてんだ」
よしのり・信長「・・・よぅ／(よく来たと) よぅ！」
隼人　「コーチすいません」
よしのり「隼人」
隼人　「(畔木に) すぐ帰します」
よしのり「このままだったら俺も試合には出ない」
隼人　「(よしのりに近づいて) 話なら後で俺が聞くから今は黙って帰れ」
よしのり「魔王に言わなきゃ意味ないだろ」
隼人　「(魔王の顔を伺いながら) お前、来い (無理やり引きずって)」
よしのり「(大げさに) あ、暴力ですか？またですか？」
信長　「(姑の様に) 恐ろしすぎて成仏しそう」
隼人　「(お前らなと大きく手を離し)」
よしのり「先生」
隼人　「もうかまわないでいい」
よしのり「向井くんは別チームだけどそれでも僕の仲間なんです、だからお願いします
(頭を下げる)」

と、東高メンバーと由衣。
畔木、メンバーたちの顔を見渡す

畔木　「はっきり言って西高と我々の力は対等ではない。いくらこちらが原因とはいえ君達の様なレベルのチームに振り回されるわけにはいかないんだ」

よしのり「・・・」

畔木　「だから条件がある。今からもう一度ゲームをして今度の試合に向井を出さざるを得ないと俺が判断すれば出場させよう。その逆であればもう向井には構うな」

よしのり「わかりました」

畔木　「向井、いいな」

隼人　「（よしのりの目を見てあきらめながらも決め）はい」

×　×　×　×

S59　同・体育館

卓球台によしのりと隼人がつきそれをチームと畔木、由衣が見ている

由衣　「勝負に出たな」

伊達　「魔王に喧嘩売るなんてどんな勇者だ」

蜂須賀　「そんな強かったか？」

亀井　「ぼこぼこにされてた」

朝倉　「あれから西高にはコーチがついたろ」

伊達　「だからってそう簡単に向井は倒せないだろ」

由衣　「わかんないじゃん」

伊達　「どっちの味方だよ」

由衣　「私はいつだって，選手，の味方」

□　□　□　□

よしのりと隼人の試合

隼人が構える

光秀　「彼に勝算が？」

信長が大袈裟に刀を半分抜くが、今は戦う気がないと鞘に納める。試合はポイントを隼人がとっていく

蜂須賀　「やっぱりだめか」

亀井　「そう簡単に勝たれてもな」

最上　「いや、まだだ」

と、隼人のスマッシュが決まったかのように見えるが、体を一気にひねり、球を返すとよしのりのポイントになる

最上　「向井！全力で行け。ここで負けても悔いがないようおもいきり」

隼人、よしのりに目をやる

最上　「彼には覚悟ができた」

よしのりが応戦していくが次第に押されていく。

隼人、最後のポイントを取る

信長　「（不服ながらも認めつつよしのりに一瞬横目を向けて）修行が足りん」

よしのり「（つぶやくように）うるさい」

試合が終わり、試合を見つめていた一同は畔木の言葉を待っている

□　□　□　□

よしのり「やっぱ強い」

隼人　「あたりまえだ」

畔木　「（近づき）確かに君は変わったな。いや、それも元々だったか？とにかく驚いたよ。だが、君のレベルとならうちの他の選手でも替えはきく」

よしのり「・・・」

よしのり、しばらく立ち尽くすがやがて出口へ向かう

最上　「君は強い！」

よしのりがその声で振り返る

畔木　「最上、なんだ」

最上　「東高卓球部のやり方ではありません。俺たちは油断をしない、だからこれまで勝ってこれた。他の選手でも勝てる可能性はいくらでもある、だけど、向井であれば勝率はもっとあがる」

畔木　「・・・」

最上　「今ので確信しました。西高はこちらの全力に値するチームです」

と、伊達、朝倉、亀井、蜂須賀、由衣が一人ずつ一歩前へ出る

畔木　「・・・（畔木が彼らを見渡し隼人を見る）向井、試合に出ろ。ただし、西高と当たった場合のみだ、例外はない、いいな」

隼人　「・・・（しっかりと畔木の配慮をしっかりと飲み込み）はい」

畔木がよしのりを横切ろうとして止まり

畔木　「西高ではもったいない、編入してくるか」

よしのり「ごめんです、従うのは鬼で充分」

畔木、去る

最上　「（よしのりに）なにがなんでも上がって来い！」

最上が去っていく。

東高メンバーと由衣が卓球台を片付けていく

蜂須賀「（その途中小声で）おい、あんなん言って俺達が途中で負けたらどうすんだ」

亀井　「黙ってろ、俺たちはシードだ」

伊達　「（抱きしめる）」

亀井　「（よしのりの顔を見て）いつものやつだから」

朝倉　「（カードを渡して）向井。逆位置で死神のカードが出た」

伊達　「なんだその不吉なカードは」

隼人　「意味は」

朝倉　「起死回生」

片付けが終わり去っていく一同。

由衣が一瞬よしのりに振り返り目を合わせてついていく

隼人　「・・・お前はなぁ」

よしのり「首洗って待ってな」

隼人が観念して頷き、それ以上言葉を出さず去る。

しかし、光秀は残る。

信長が目をやると理解し先に去るよしのり

信長　「降参するならいまのうちじゃ」

光秀　「まさか。降参する気も、今更、許されようとも思ってはおりません」
信長　「勘違いするなよ、家来の一人や二人に寝返られたところで屁にも思わんわ」
光秀　「・・・」
信長　「俺が腹を立ててるのはな、お前の根性じゃ！言ったろ！首をとるなら正々堂々来いと。それを寝込みなど襲いやがって！（子供が駄々をこねる様に）寝てる時は駄目だろ！・・・ルール違反じゃ！」
光秀　「・・・」
信長　「勝ち方を間違うたから猿に足をすくわれるんじゃ、愚か者め。光秀、お前も天下が欲しかったか」
光秀　「はい」
信長　「ばかめ、おぬしの器じゃ収まりきらずこぼれるのが落ちじゃ」
光秀　「ええ、ですが目指すなら大きくて無謀じゃないと。（よしのりの方に顔を向け）彼のように」
信長　「（大きく笑い）ならばもう一度試してみろ、本能寺ではなく次がお前の最後の、十手目じゃ」

信長が去っていく。
その背中を目に入れ、光秀も去っていく

×　×　×　×

S60　西高・体育館
西高メンバーがランニングを終えて帰って来ると倒れこんでいく。
池松は案外余裕そうである。
そこによしのりと信長

よしのり　「みんなどうしたんですか」
全員　「おめぇのせいだよ」

と、見たこともないニッコニコの笑顔でやってくる鬼。後ろには琴乃

鬼　「（それはそれは笑顔）やぁ、鷹宮」
よしのり　「（悟って）あ、いや、あのその、あの」
鬼　「（持てるかわいげの全てを出して）全部、聞いちゃった」
池松　「（えづく）」
鬼　「吐くな！（よしのりに）ちょっと来い！（よしのりを目の前に寄越し）あれぇ、あなたたちって最強なんだっけ」
よしのり　「（怯え切って）ざ、雑魚です」

鬼　「友情ごっこにふけってる時間なんてあったんだっけぇ」
よしのり「（頭を下げる）」
鬼　「（ため息をしながらもあきらめて）それで」
よしのり「（頭を上げ）・・・どうにか戦えそうです、二回勝てば」
鬼　「（さすがに少し驚き）どうやって説得した」
よしのり「試合をして」
細越　「勝ったのか」
よしのり「負けた」
鬼　「（怒りで一歩出る）」
よしのり「ごめんなさい」
伊勢川　「鷹宮、次はこそこそせず皆に話せ、じゃないと（少しだけひそひそと）俺が殺されかける。勝手な事をするならみんなでしよう、チームなんだ」

よしのり、周りに目をやり、頷く。
と、田中

田中　「（彼らの姿が見えない奥から）森先生森先生、（名前を言ってしまった事に）あ」

メンバーたちが森「えいこ」を見る

田中　「まだ、いたのか、すいません、こいつらにくれてやる名前はないんでしたっけ」
えいこ　「かまいませんよ」
英　「森先生？」
細越　「（こそこそと）良かった名前があった、人の子だ」
池松　「（こそこそと）ばか言え、人の皮をかぶったカモフラージュだ」
えいこ　「なにか言ったか」
信長　「森・・・？」
よしのり「（つい声を出し）偶然ですよ」
英　「どうした」
信長　「よしのり」
よしのり「（信長の目を見て聞くしかなく）コーチ。森って、ひょっとして森蘭丸の子孫、なんて事はありませんよね」
えいこ　「知らん、そんな話聞いたことはない」
よしのり「ですよね（小声で）ほら」
信長　「（それでもえいこをしっかりと見つめ一歩前へ出る）」
えいこ　「森えいこだ、これまで以上にお前らをしごきにしごいて地区大会なんてあまっ

ちょろい、インターハイまで押し上げてやるから覚悟しろ、厳しい戦いになる」

全員「はい」

えいこ「どうだ今日はしまいにするか」

雄「は（い）」

よしのり「もう少しだけ付き合ってください」

田中「いいのか、もうぼろぼろだぞ」

細越「どのチームだってきっと同じくらいは、いや東高はこの４倍はやってる筈です」

田中「まぁほどほどにな」

伊勢川「先生こそ、先帰らなくていいんですか」

田中「馬鹿言え、帰るよ」

伊勢川「帰んなよ」

田中「明日もお前らの頑張る姿楽しみにしてまぁす」

田中、去る

えいこ「よし、お前ら。ラケットを持て」

メンバーたちがラケットを握り信長は刀を抜く。
それからひとりづつ得意のプレイをしていく。
彼らの目から迷いなどはとうに消えた

×　×　×　×

Ｓ６１　東高・体育館

東高のメンバーが畔木の指導のもと、目をそむけたくなる程のトレーニングをしている

畔木「椅子は一つだ、負ければ座る資格はない。お前らは今日まで腰を掛けてきた、でも明日はどうだ、怠けていればどかされ再びチャレンジャーに成り下がる。勝って明日もその椅子に腰をかけろ。勝つことだけが条件だ」

×　×　×　×

Ｓ６２　西高・体育館

ラケットを手にした西高メンバーたちが勇ましい顔でえいこと琴乃の前に並ぶ

えいこ「異名？」

細越「（勇ましく）東高の人たちが生意気にも異名があるので僕たちもつけたいなって。負けたくないじゃないですか」

えいこ　「そんなものはいらん」

伊勢川が琴乃に勇ましくメモ紙を渡し、列に戻る

伊勢川　「（勇ましく）読んでくれ」
琴乃　「（仕方なくメモ紙を広げ）背中の荷物をみんなに分けたら思った以上に身軽です。この先一歩も引きやしない。その名も―」
伊勢川　「（勇ましく）キャプテン、伊勢川友也！」
琴乃　「大きい体に小さい器、お化けもコーチも怖いけど、マグマをこの手にどデカく込める。その名も―」
細越　「（勇ましく）ジャンボボルケーノ一世、細越直人！」
琴乃　「二人の英雄、ここにあり、片方ハンサム、あと変態。どちらがかけても駄目なのだ、その名も―」
雄・英　「スーパーデラックスマイティブラザー」
雄　「（勇ましく）中世古雄！」
英　「（勇ましく）中世古英！」
琴乃　「えづき続けて早3年、みんなのケツを追っていた、だけれど今度は追いていく、その名も―」
池松　「（勇ましく）スタミナガソリンスタンド、池松和馬！」
琴乃　「一度は地獄へ堕ちたとて、なんべんだろうと這い上がる。飛べない鳥でも羽を広げる、両手を広げてぴょんぴょんと。その名も―」
よしのり　「（勇ましく）卓球台のペンギンプリンス、鷹宮よしのり！」
伊勢川　「西高卓球部改め、我ら」
メンバー　「鬼の軍隊！」
伊勢川　「西高―」
伊勢川・細越・池松・雄・英・よしのり　「ＧＯ！／がんばります！／ぜってぇ負けねぇから！／おっぱい！／めちゃめちゃ努力！／とびまーす」
琴乃　「どうします？」
えいこ　「もうわかんない」

えいこ、琴乃が疲れ果てて去っていく。
西高メンバーも勇ましく去っていく。
と、残される信長

信長　「天がこの身を救わんば、奇怪なこの世に落とされる、迷いも弱さも斬り捨てた、若い猛者といざ出陣、我が名は信長、新たな天を掴む者！・・・・見ておれ、

蘭丸」

信長、勇ましく去っていく

暗転

Ｓ６３　電車・車内（朝）

田中が席に座って居眠りをしている。

電車が駅に到着し、停車する。その揺れで田中が起きる。

扉が開く。と、畔木が入ってきて、偶然、田中の前に立つ。ほぼ同時に二人の目が合うが、田中が寝たふりをする

畔木　「おはようございます」

田中　「（観念して目を開けて）おはようございます」

沈黙

田中　「申し訳ありませんでした。鷹宮がそちらになんか、お邪魔しちゃったみたいで」

畔木　「いえ、私もいい経験をさせていただきました」

田中　「経験」

沈黙

田中　「・・・どうですか、東高卓球部の皆さんは」

畔木　「手の内は明かしませんよ」

田中　「・・・そうですか」

沈黙

畔木　「でも、意外でした。言い方は悪いですが、根性がある生徒、いえ、選手がそちらにいたなんて」

と、いつの間にか座る田中を挟むように畔木の横に立つえいこ

えいこ　「当然です、私が鍛えているんですから」

田中　「・・・おはようございます」

えいこ　「おはようございます。西高コーチの森です」

畔木　「東高コーチの畔木です、もしかして、あなたが噂の鬼ですか」

えいこ　「（横目で畔木を見る）そんなこと一体誰が」

畔木　「うちに来た時に鷹宮君が」

えいこ　「そうですか、情報ありがとうございます」

畔木　「お互い災難だ、私も魔王と呼ばれたりしてますから」

えいこ　「・・・」
畔木　「どうですか、西高の選手は」
えいこ　「手の内は明かしませんよ」
畔木　「でしょうね」
えいこ　「ただ、心配には及びません、あいつらは雑魚で卓球の「た」の字もわかっていませんでしたから」
畔木　「でした、か」
えいこ　「・・・」
畔木　「油断などしません、たとえ、’格下’だとしても全力で戦います」

電車が止まり扉が開く

畔木　「では、お先に」
田中　「（立ち上がりながら）いやー、さすがに隙がありませんね」
えいこ　「いや、ヒビが入った」
田中　「え」
えいこ　「あいつらが格下だと、油断した」

×　×　×　×

Ｓ６４　鷹宮家・玄関

よしのりが靴紐を結び、信長が刀を腰に差す。
よしのりが靴紐を結び終えるとそこに弁当を持った琴乃がやってくる。
よしのりの顔の横にぶらさげ、それを彼が受け取る

よしのり「父さんは」
琴乃　「いつもの」
よしのり「そ」
琴乃　「あのさ、ありがとう」
よしのり「なにが？」
琴乃　「何となく、だけど、毎日退屈じゃなくなった」
よしのり「うん」

と、刀馬が両手に弁当を持ってくる。それをよしのりに向ける

よしのり「え」
刀馬　「つくった、たまにはいいだろ（琴乃にも）お前もだ」
琴乃　「え！」

刀馬　「食え」
よしのり「（弁当を掴む）」
刀馬　「よしのり、勝ち以外この家に持ってくるな」
よしのり「（返事を返すようにきつく鞄をしめる）」

刀馬、去る

信長　「出陣じゃ！」

よしのり、ヘッドフォンを耳につけ曲をかける。
三人が家を出る

×　×　×　×

Ｓ６５　春の卓球大会会場・近く
よしのりを見つけた伊勢川が琴乃の横に並び歩く。
それをみつけた細越がよしのりの横に並び歩く。
それを見つけた池松が伊勢川の横に並び歩く。
それを見つけた雄と英が細越の横に並び歩く。
そして、会場へと向かう

×　×　×　×

Ｓ６６　同・控室
西高メンバーがそれぞれオレンジのユニフォームに着替える
そこに田中とえいこ

田中　「みんな遂に決戦だ！怪我無く、元気いっぱいで頼むよ。勝ったら、牛角だ、一人せんごひゃくー」
えいこ「いいか、よく聞け！負けたらそこでしまいだ、負けて泣くなら負けるな、勝つまで打ち続けろ、転びそうになれば振り返りクソを拭ってくれるあほヅラ達を見渡せ、いいな、地獄はお前らを裏切らない。目いっぱい暴れてこい、牛角なんてなまぬるい、かかってくる奴ら全員ぶっ潰したら、叙々苑だ！」

田中が財布を確認する

×　×　×　×

Ｓ６７　春の高等学校卓球大会
団体戦・一回戦　港高校学校対西高等学校。
試合は以下の通り行う。
１、円陣

2、お互いのラケットを確認。
3、じゃんけんを行いサーブの順番を決める。
4、対戦

□　□　□　□

第一試合　シングルス１
よしのりと港高校の「三浦」が台につく。
よしのりとほぼ互角でポイントの取り合いになる。
次第によしのりの優勢になりマッチポイントで彼のサービス。
長いラリーになる。その途中、時間が戻る

×　×　×　×

Ｓ６８　鷹宮家・よしのりの部屋（回想）

信長が刀を振っている

よしのり「うつけ？」
信長　「頭が空っぽじゃとガキの頃によく言われたわ」
よしのり「教科書の信長さんじゃ考えられないな」
信長　「確かに空っぽじゃ、だからこそ勝てる。よしのり、相手との力がほぼ互角の場合、戦の勝敗を決めるのはなんだと思う」
よしのり「積み上げてきた練習？」
信長　「いや、むしろ邪魔じゃ、あの赤鬼は勝つのに必要な技を教えとる。だが、時にはそれを捨て、身を軽くしてこそ振れる刀がある」
よしのり「難しいな」
信長　「そうすれば叶うぞ」
よしのり「・・・」
信長　「言ってたではないか、飛ぶのだろ」

×　×　×　×

Ｓ６９　第一試合の途中
互角のラリーの途中よしのりの動きが次第に大きくなる
相手が球を返す間、一瞬よしのりの力が抜けたかのようにラケットを持つ手が降りる。だが、相手の球が返ってきたその瞬間、床を蹴り飛ぶ。
その勢いのまま打ちポイントが決まりよしのりが勝つ

信長　「見事じゃ」

両選手が下がる

□　□　□　□

第二試合　シングルス２

細越と港高の「杉田」が台につく。接戦だが杉田が強く前に出ている

琴乃　「押されてる」
田中　「あいつにしては珍しく控えめだな」

と、細越のミスショットで相手の台を超える。
杉田がまるで挑発するかのように細越の顔を見て声を上げる

琴乃　「お願い、押さえて」
田中　「（気づいていうかのように）いや、大丈夫だ」
琴乃　「え」
田中　「笑ってる」

杉田のサーブ。
ラリーが続く中で時間が戻る

×　×　×　×

Ｓ７０　西高・体育館（回想）

細越が相手の球を返すがこぼれ声を出しいらつく。
と、えいこ

えいこ　「おい、おこりんぼう、今お前の体内ではなにが起きてると思う」
細越　「噴火寸前。押さえるなんて無理ですよ」
えいこ　「誰がそう頼んだ。人はキレると脳にアドレナリンが溢れる。アドレナリンは体に作用し筋肉と心臓の働きを向上させて身体能力をあげるんだ。つまり、お前は試合途中に怒るだけで自分で（わざとらしく）ドーピングを打てる。今お前は誰よりも強い。なのにその怒りを無駄にするのか」
細越　「・・・」
えいこ　「むしろ相手に笑って感謝しないとな」
細越　「・・・」
えいこ　「細越、キレろ」

細越、相手に構えラケットを振る

×　×　×　×

Ｓ７１　第二試合の途中

細越の強烈なドライブが決まり地を這うような怒りで吠える。細越が勝つ。
選手が下がる

□　□　□　□

第三試合　ダブルス
雄・英と港高の「鈴木」と「工藤」。
両チーム共、コンビネーションが良くポイントを重ねていく。次第に港高ポイントが続く。
港高のマッチポイント。
鈴木のサーブ。
しばらく打ち合いが続く中、雄が工藤のスマッシュをかろうじて受けるがフォーメーションが崩れる。
その隙を突き相手がラケットを振る。
英が反応して球を追いかけると時間が戻る

×　×　×　×

S72　帰り道・公園（夕）
雄と英が並んで歩く

雄　「兄弟で繋がって気持ち悪い以外の意味あんのか」

と、親子で自転車の練習をしている子供の自転車が倒れる

雄　「懐かしいな、お前も半べそかいて自転車、練習してたな」
英　「兄ちゃんも泣いてたぞ」
雄　「お前が俺に倒れてきたんだよ、支えてなかったら血まみれだったぞ」
英　「覚えてない」
雄　「安心しろ、また倒れても拾ってやる」
英　「必要ない」
雄　「無理すんなよ、泣いたら兄ちゃんが慰めてやる」
英　「彼女に慰めてもらうからいい」
雄　「・・・え、ちょっと待って、彼女いるの？」
英　「二人目」
雄　「俺が泣きそうなんだけど！」

×　×　×　×

S73　第三試合の途中
相手のスマッシュに英が反応しラケットを伸ばすが、わずかに間に合わずそのまま床に崩れる。

ポイントが決まり鈴木・工藤が勝つ。
雄が英に近づき手を差し伸べる。それを手に取り英が立ち上がる
□　□　□　□
第四試合シングルス４
池松と港高の「木口」
木口は速攻型で容赦なく打っていく。しかし、辛抱強く返していく池松。
木口が次第にばててていく

田中　「びっくりだ、初めて相手がバテてるのを見た」
えいこ　「当然です。あいつは毎晩毎朝、私が鍛え上げた犬と，並んで、走ってますから」
×　×　×　×
Ｓ７４　散歩コース（回想）
犬の「ジェット」が飛んでくる

池松　「お前がジェットか、いいか、これから一緒に走るがくれぐれも突然吠えたり、勝手に走り出したりはしないよう（に）―」
と、ジェットがいきなり走り出し右左に振り回される池松

池松　「待て待て待て止まれ止まれ止まれ」
と、ジェットが素直に言うことを聞いて急ブレーキを踏む

池松　「（息を切らして）こっちはタフなカットマン様だ、体力で負けてたまるか。おい、ジェットだかロケットだか知らないけどな、好きに走れ、どこだろうがついてってやる」
と、ジェットが足を回し気合を入れる

池松　「あ、でも、さっきみたいに止まって、って言ったらちゃんと止まって（ね）」
ジェットが一気に走り出す。
池松、振り回されるが次第についていく。
ジェットが右に行けばステップを踏むように右に、左に行けば左にしっかりと足を使っていく。
池松、やがて、ジェットの横に並び走るようになり一緒に右へ左と移動する。

と、ジェットが走り去っていく

×　×　×　×

S75　第四試合の途中

木口が左右へ池松を振るが池松はなんてことなくついていく。

池松のマッチポイント

次第に今度は池松が木口を振り回していく。

と、池松、カットではなくバックショットを打つ。

これが決まり池松が勝つ。その瞬間、西高メンバーが声を上げる。

両チームが並んでおじぎをして下がっていく

田中　「勝ったぞ、本当に勝った！」

えいこ　「（喜ぶメンバーを）お前ら！」

全員軍隊のように並び静まる

えいこ　「よくやった。次も勝て」

二回戦が始まる。

相手チームの川名高等学校のメンバーと向かい合うように並びお辞儀

□　□　□　□

第一試合シングルス1

よしのりと川名高の「芝」。

よしのりが極めて落ち着いて確実にポイントを返していく。

信長、刀を抜くまでもないとその様子を眺めている。

よしのりのマッチポイント。

これも危なげなく取り、よしのりが勝つ。両選手下がる

□　□　□　□

第二試合シングルス2

細越と川名高の「春日」。

細越が圧倒しポイントを殆ど取られる事なく勝つ。両選手が下がる

□　□　□　□

第三試合ダブルス

雄・英と川名高「白山」・「千石」

英　「ぜってぇ、勝つ」

雄　「お前はいいな、彼女が見てるし」

英　「（正気かと間を開けて）わかってないなおにいちゃん、勝てばモテてモテて仕方ないぞ、なんだったら選びきれずに両手にエロ女教師とスケベ女子高生だ」

雄　「・・・ぜってぇ、勝つ！！」

試合が始まる。

雄、英、序盤は苦戦しつつもお互いを補うように試合をしていく。

やがて形勢が変わり英がポイントを決める。

西高のマッチポイント。

食らいつくように打ち返し雄がポイントを決めた。

雄・英が勝つ。両チームが並び、お辞儀をする

×　×　×　×

S76　同・控室（昼）西高メンバーとえいこ、田中、琴乃

伊勢川　「みんなありがとう、俺が出る幕はなかったな」

細越　「よく体を温めておけよ、次はそうはいかないぞ」

えいこ　「その通りだ、お前ら今の試合は忘れろ。同じプレイができると思うなよ、相手は東高だ。向こうも全力で潰しにかかってくる、押されたら押し返せ」

全員　「はい」

田中　「次の試合まで時間があるから今は休め、はしゃいで無駄に体力使うなよ」

えいこが去っていき、田中も去る。

メンバー達も各々去っていく。なんとなく伊勢川と琴乃が残る

琴乃　「すごいね、別のチームみたい」

伊勢川　「俺も負けてられない」

琴乃　「がんばれそう？」

伊勢川　「（鞄から弁当を出して）これ食べるからがんばれる」

と、床にタオルを忘れていた雄が戻ってくる

琴乃　「口に合うかわからないけど」

伊勢川　「（首を横に振り）ありがとう」

琴乃が去っていく。

伊勢川も去ろうと振り返ると雄と目が合う

雄　「え、なに今の」
伊勢川　「え、なにが」
雄　「え、付き合ってんの」
伊勢川　「（悪気はなく）まだ付き合ってないよ」
雄　「え、まだってなに」
伊勢川　「え」
雄　「あーあれですか、これが付き合う前の一番楽しい時期ってやつですか、あーそうですかあれ？あなた女に手出してる暇があるなら練習しようとか言っておりませんでしたっけ、ええ！？」
伊勢川　「・・・（ぜんぜん違う方向に顔を向ける）」
雄　「硬派な部長気取っておいて目離したすきにこれかよおい！」
伊勢川　「しょうがないだろ！好きになっちゃったんだ！」
雄　「食わせろ、それで許してやる」

伊勢川が弁当を後ろに隠す。
雄が迫ってくる。
伊勢川、避けながら去ってく。追いかける雄

×　×　×　×

S77　同・エントランス
よしのりと信長。よしのり、足を止め振り返る

信長　「なんだ」
よしのり　「信長さん、俺達がもし負けたらあなたは―」
信長　「安心せぇ、負けでもすれば余計に未練でこの世にしがみつくわぃ。戦前に弱音を吐くな、鬼に食われるぞ」
よしのり　「わかってる。そっちこそ試合前に寝るなよ、また襲われちゃうから」
信長　「・・・そうだな。お前は啖呵でも切っておけ、俺は刀でも振っている」

信長が奥へ目を向け、邪魔はしないと去る信長

隼人　「本当に上がって来るとはな」
よしのり　「どうだ、すごいだろ」
隼人　「俺たちはもっとすごい。逃げるなよ」
よしのり　「（大丈夫だと笑いつつ）隼人、おかえり」
隼人　「ただいま」

と、月子

月子　「あ」

よしのりと隼人、何となく気まずそうに

月子　「よぅ」
よしのり・隼人「おぅ」
月子　「久しぶりだ」
よしのり・隼人「こないだ会っただろ」

なんだと、といった様子で顔を見合わせるよしのりと隼人

月子　「三人では」
よしのり・隼人「ああ」
月子　「応援してる、どっちも」

なんだかきまずい間が流れながらも

よしのり「確かに三人で会えてよかったよ」
隼人　「また、遊ぼう」
よしのり「（あまりに驚き）遊んでくれるのか」
隼人　「俺をなんだと思ってんだよ」
よしのり「ずっと練習だろ、飯食べ練習、風呂出て練習、休まず寝ながら練習」
隼人　「休ませろよ」
月子　「じゃあ、どこ行く」
隼人　「卓球」
よしのり・月子「（嫌な顔）」
隼人　「嫌がるなよ。それじゃあ、どこか考えとけよ、映画でもゲーセンでもなんだっていいから・・・」
月子　「（しっかりと彼の気持ちを汲んで）うん」
隼人　「（よしのりに）そろそろ時間だ」
月子　「よしのり、隼人。いってらっしゃい」

月子が去っていく

×　×　×　×

Ｓ７８　同・三回戦会場

西高と東高に分かれて円陣を組んでいる。

その様子を西高はえいこ、田中、琴乃が。東高を畔木、由衣が見守っている

最上　「（あくまでニコニコ）彼らの目を見たか。あれは戦う覚悟を持った目だ。油断すればこっちがのみこまれるぞ。彼らは強い！それでも俺らには及ばない、なぜなら魔王の元で鍛え上げられた軍団だからだ、相手が蠅でも鼠でも全力でぶっつぶす、それが俺達東高だ！勝ってうまい肉食べるぞ！」

畔木　「今日は蟹だ」

最上　「（目つきが変わり）東高―」

伊勢川　「魔王がなんだ、あいつらがなんだ、こっちは地獄の鬼を相手にしてるんんだ、痛くも痒くもない、細越、池松、雄、遅すぎたけどお前たちと本気になれて良かったよ、行けるとこまで行こう。鷹宮、英、俺はお前らの為に戦うよ。いいか！俺たちはケツの穴を見合った仲だ、どんなにツラくても俺達を信じよう、今の俺達なら勝てる！西高―」

東高、西高の双方が一気に吠える

□　□　□　□

第三回戦・第一試合シングルス１

伊勢川対最上。

最上が圧倒的。伊勢川はなんとかついていこうとするがポイントを取られていく。

伊勢川、初めは自分から攻めていっていたが防戦一方。途中、かろうじて返した球が浮きそれを最上が狙う。

伊勢川、思わず、足を後ろに下げようとする。

が、後ろのメンバーの顔が目に入り何とかして足を前に出しおもいきり球を返す。

伊勢川のポイント。会場が沸く。

そこから伊勢川は一切迷いがなくなる。が、最上は譲らない。

最上マッチポイント。

彼のスマッシュに追いつこうとするが伊勢川が追いつけず最上が勝つ。

伊勢川、下がろうと後ろを振り返ると細越。細越が任せろ、と伊勢川の肩に手を置き台に向かう

□　□　□　□

第二試合シングルス２

細越対伊達。
強烈な球の打ち合い。どちらかがポイントを取ればどちらかが取り返す。
途中、伊達のポイントが続く。
細越が一度息を吐き呼吸を整え、顔が笑う。そこから細越の猛反撃が始まる。当然、伊達も引かない
が、わずかに細越が上回り彼のマッチポイント。
細越、まるで牛のような攻撃的なショット。そして、ポイントが決まる。
細越が勝つ。
伊達が悔しそうに下がると東高メンバーが彼を抱きしめる。
細越が振り返ると雄と英。
細越が両手を上げ、そこを雄と英がハイタッチ

□　□　□　□

第三試合ダブルス
雄・英と亀井、蜂須賀
練習試合とは比べられない程、蜂須賀が動き回る。それを支えるように亀井。
雄と英もそれに負けじとポイントを取っていく。
ペア同士の意地の張り合い。どちらもポイントを取れば称えあい、取られれば励まし合う。
次第に雄・英が優勢になりやがて二人のマッチポイント。
雄がサーブ打ち、途中、こぼすかと思った球を転びながら打ち返す。
蜂須賀もその球に飛びつく。が、取れず床に転ぶ。
ポイントとなり雄と英が勝つ。
雄が英に手を伸ばし、亀井が蜂須賀に手を伸ばす。その手を掴む英と蜂須賀。
雄と英が振り返ると池松。
池松、勢いよく二人の間を通りすぎていく

□　□　□　□

第四試合シングルス４　池松と朝倉
朝倉は練習試合と変わらずにペンのラケットを握る。
朝倉のショットを何度も粘り強く返していき、池松のポイントが続く。
が、朝倉が突然攻撃だけではなくペンでだがカットも混ぜていく。
池松、それでも返しラリーが続いていく。
が、やがて朝倉のマッチポイント。
最後まで食らいつく池松。
途中、激しい打ち合いになり朝倉のポイント。
朝倉が勝つ。両者が下がり両選手をそれぞれのチームが受け入れる。
これで二対二。あと一勝だと、西高はよしのりに、東高は隼人に指を一本

立てる。背後には信長と光秀

□　□　□　□

第五試合シングルス４

よしのりと隼人。

二人がラケットを交換し見せあう。

以下の会話は誰にも聞かれることはない

隼人　「（目を合わさずラケットを見ながらさりげなく）フラれたよ」

よしのり「今言うなよ」

隼人　「（目を合わせ）やる気出たろ」

よしのりが思わず息を漏らすように笑いラケットを返し隼人も返す。

じゃんけんをして隼人が勝つ

信長　「来い、光秀（構える）」

よしのり「（構えて、つぶやくように）来い、隼人」

×　×　×　×

Ｓ７９　同一観客席

月子がよしのりと隼人の試合を客席から眺めている。

そして、隼人がまるで楽しむかのように球を頭上に上げる

暗転

Ｓ８０　試合会場・外（夕）
試合を終えたよしのりが出てくる。
と、後ろから月子が駆け足で駆け寄りわざとよしのりにぶつかり前に出て振り返る

月子　「飛んだな、ペンギン！ピョンピョンしてた」
よしのり「ほめてるのか」
月子　「うん」
よしのり「・・・月子、（何かを口に出そうと）」
月子　「好き」
よしのり「え」
月子　「私も好き。だけど、やっぱりこのままお互い違う方に向かった方がいいと思う。私はいつか遠くに行っちゃうし、きっと、よしのりも」
よしのり「・・・」
月子　「それで、また集まろう。３人（で）」

と、よしのりが月子を抱きしめる。
月子、おもわず応えようと彼の背中に触れようとした時、よしのりが離れる

よしのり「待ってるよ、それでも」

月子がなにかに耐えながらしばらくして大きく頷く。
そして、去っていく
×　×　×　×
Ｓ８１　西高・卒業式会場・外
数か月後。
卒業証が入った筒を持つ伊勢川

伊勢川　「これから練習か」
よしのり「卒業式の日にやらなくても」
伊勢川　「だからこその鬼、だろ。がんばれよ」
よしのり「先輩はこれからも卓球を」
伊勢川　「・・・あそこまではもう熱くはなれないよ」
よしのり「・・・」
伊勢川　「よしのり、何かとおしつけてしまったけど自由にしていい。これからはお前ら次第だ」

よしのり「部長」
伊勢川　「キャプテンはお前だろ」

と、英

伊勢川　「いや、やっぱり間違えてなかったな。ドラゴン」
よしのり「次はもっと上を飛びます」
伊勢川　「そうこなっくちゃ」

伊勢川、去る

よしのり「死んでも集めなきゃな、部員」
英　　「（敬礼して）コーチからの指令だ、『攫ってでも連れて来い』」
よしのり「（敬礼）・・・英」
英　　「ああ（拳を差し出す）」

よしのりがそれに応え、英が去る。
と、信長がよしのりの前に立つ

×　×　×　×

Ｓ８２　第三回戦・会場
時間が戻り、東高、西高のメンバーと試合を見ていた者達の姿。
よしのりと隼人の試合。
どちらも譲らぬ執念の戦い。
だが、月子の目にはどこか懐かしくうつり、よしのりと隼人もまるで子供が
はしゃぐかのように卓球をしている
信長と光秀は刀をまだ抜かず彼らの後ろについていく

×　×　×　×

Ｓ８３　外―工場
試合後のえいこと刀馬が電話で会話をしている

刀馬　「よしのりは」
えいこ「あなたに似て良く飛んでましたよ」
刀馬　「そうか」
えいこ「聞かないんですか、どっちが勝ったのか」
刀馬　「（少しの間が開くものの）興味がない」

えいこ　「（驚きながらも彼の気持ちを理解して）そうですか」

刀馬、電話を切る。その顔は柔らかい

×　×　×　×

Ｓ８４　三回戦試合会場

よしのりがポイントを取られる

よしのり、床に転がるピンポン玉を拾い、隼人を見る。

隼人はわずかに頷く。

よしのり、再び卓球台の前に立つ。

二人の顔が笑っててている

信長　「なにを笑っている」

よしのり、何でもないと首を振る

よしのり「さぁ、あとは飛ぶだけだ！」

よしのりのサーブ。

どちらも譲らず打ち合いが続く。

と、隼人が球を浮かして返してしまう。

即座に隼人が構え、光秀が刀を抜く。

一瞬ではあるがよしのりと信長の目が合う。

信長が強く刀を抜き振りかぶる。

よしのりは足で床を強く蹴り、ピンポン玉へと高く跳んだ

全暗転

《信長ピンポン　ＮＯＢＵＮＡＧＡ　ＰＩＮＧＰＯＮ！　おしまい》